明治二十五年十一月十五日發兌

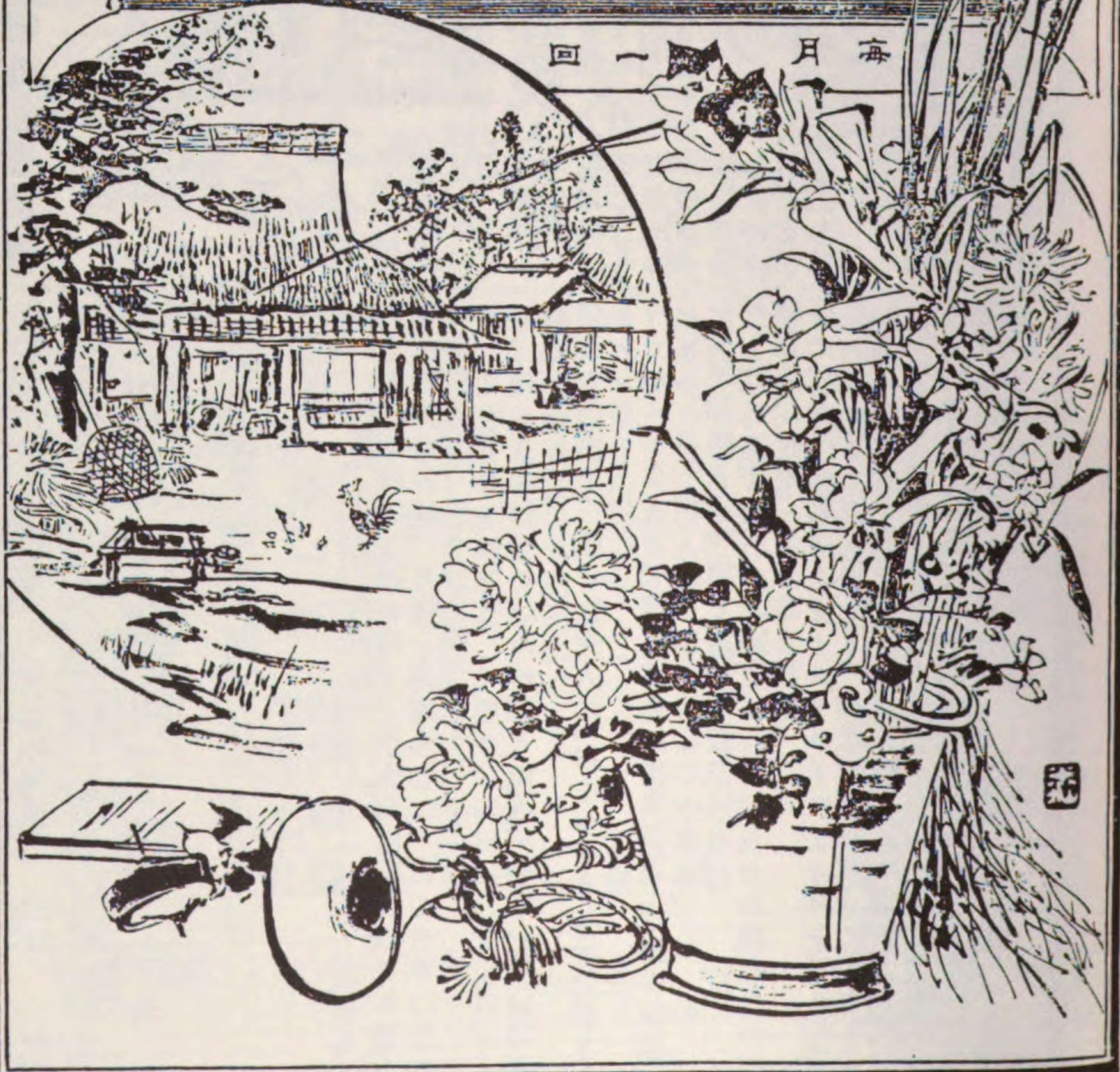
THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

定價全五錢

東京家庭雜誌社發兌

每月一回



第叁號

魯國ドストイエフスキイ作
日本不知庵主人譯

罪と罰

卷之一既成

全四巻四ケ月ニ完全ス

一冊 正價金四拾錢●郵稅六錢

ドストイエフスキイは詞壇に一生面を開きし心理小説家なり其筆の精透にして且つ鋭利なる他の小説家の企及する所に非ず以て社會の大パノラマたるべく以て人心の解剖圖たるべし「罪と罰」を評して罪人の心理學と云ふは又怪むに足らざるなり

發行所 東京市日本橋區大傳馬町二丁目 內田老鶴圃

大販賣 ●神田東京堂●京橋東海堂●中西屋●大倉書店

德富猪一郎序文 平田久纂譯

伊太利建國三傑

全一冊 定價二十錢 郵稅四錢

美麗なる肖像幷に地圖を挿む

伊太利は如何なる國か、曰く、伊太利は歐洲の日本也。
伊太利人は何時、其國を再建せしか、曰く日本維新の時を距る甚だ近き時に於て。
伊太利の革命は如何にして起り、如何にして成就せしか、曰く日本維新の革命の起りたるが如く、成就せるが如くにして。
伊太利建國の三傑とは誰人か、曰くマッヂニー、曰くガリバルヂー、曰くカブール。
マッヂニー何人ぞ、曰く革命の豫言者也。
ガリバルヂー何人ぞ、曰く革命の俠客也。
ガブール何人ぞ、曰く革命の政治家也。
然らば此書伊太利の建國史にして、又日本維新史の引例なり、また一篇の革命論也。
此の書尤も精確なるオーソリチーにより粹を抜き精を蒐め簡にして要を得たり。革命、及ひ革命に要する立役者、豫言者、俠客、政治家を知らんと欲するものは之を讀め、添ゆるに肖像と地圖とを以てす、三傑の風采望むべく、伊太利の形勢明らかなり。

發兌元 東京日吉町四番地 民友社

漢文學講義錄

毎月三回一日の發兌

第五拾七號十一月十三日發兌 初號ヨリ近刊マデ欠本ナシ

科目及講師

(一)大學(完結)……三島中洲 (二)論語……萩原西疇
(三)孫子(完結)……內藤耻叟 (四)詩經……宮內鹿川
(五)詩話(完結)……石橋雲來 (六)莊子……大野雲潭
(七)文話(完結)……岡三慶 (八)中庸……三島中洲
(九)史記列傳……石川鴻齋 (十)八家文……五十川訒堂
(十一)政記論文……生駒膽山 (十二)三體詩……山田新川
(十三)十八史略……山田濟齋 (十四)外史(近々完結)
(十五)文章軌範……土屋鳳洲 (十六)論文……池田蘆洲

漢文學ノ自宅獨習ニ適當ナル講義錄ハ獨リ本誌アルノミ類似ノ諸雜誌ハスベテ亡滅セリ本社ハ基本金ヲ東京第百十九國立銀行ニ預ケアレバ決シテ中途廢刊ノ憂ナシ

略則
一部金八錢(二)十部前金七十錢(三)廿部前金一圓三十錢(四)三十部前金一圓九十錢(五)遞送料一部ニ付キ五厘宛(六)郵券代用ハ一割增(七)爲替ハ神田一ツ橋通爲替取扱所宛

發行所 東京麴町區富士見町一丁目 **盆友社**

當十一月十五日發兌

青年文學 第拾參號

毎月一回十五日發兌 定價郵税共六錢

(二)**本號より紙面一新氣焰万丈**

○青年文學
文學界の調子
○論壇
「酒尾飲助ものがたり」論……峰夏樹
和歌論(其一)……谷口清艶
第一章 歌とは何ぞや 第二章 和歌の變遷
田舍文學とは何ぞや……鐵斧生
史論の流行……八十八村草舍主人
再び演劇場裏の舞蹈を論ず……百合若
綠亭綱六君に呈す……肥後 新鶯生(投)
○蒐錄
冒險と初戀……空天生◎吾心の焔……死灰生
○文苑
江戸城を廻るの記……廬山人◎チルファートウェバー(中卷の三)……三谷まさ女譯◎血淚……ツルゲ子フ著みどり譯◎韻文二首
○批評
「伊太利建國三傑」をよむ
○叢談
詩歌論(四)……大西祝
經歷談(完結)……前田香雪

發行所 東京神田區猿樂町二丁目五番地 **青年文學社**

大賣捌 東京神田區表神保町 **東京堂**

明治二十五年十一月十五日發兌

家庭雜誌第參號

目錄



(孝女千代)

家庭雑誌第参號

（明治二十五年十一月十五日發兌）

社説

美はしき家風

家風とは其の家の先祖代々より養ひ來り、作り來り、誘ひ來りたる、風儀にして、各家各個の不文憲法とも云ふ可く、一家の老少男女、皆な此の家風の裡に生活する恰も鳥が空氣の中に生活し、魚が水中に生活するが如し。家風濫るれば其の家族濫だれ、家風正しければ其の家族正し。世界の聖人と呼ばれたる華盛頓も此の正しき家風の爲めに作られたり、家風は洵に大切と云ふ可し。

今美はしき家風の重なるものを擧れば、一家の内にて影日向なき事最も其の大なる一に居る。影日向とは、人前を飾り繕ふ事にして、詐僞の第一着歩なり。例へば主人の手前には儉約と見せ懸け細君が内證の借錢をなして、其の子女の晴衣を製くる如き、寔に罪なき仕方の樣なれとも、一の内證は更らに他の内證を誘ひ、遂に秘密の領分追々澤山になり、何事も打ち解けて相談するか如き事段々と相ひ減し、家内も何となく濕勝になり行く可し。斯の如く影日向の所作は、内證を生し、秘密を生し、僞善を生し、表裏反覆を生し、遂に其の極を押しつむれば、詐僞一家を支配するに到らん。實に影日向は悪魔の鍵なり、此の鍵を悪魔に渡したる日は、神聖なる家庭も悪魔に押領せられたるを覺悟す可し。斯る有樣に立ち到りたる時には、子女の敎育杯は以ての外なり自から詐僞を行ふて、焉んぞ其の子女に眞實を敎ゆるを得んや。

一家に影日向の生ずるは、主人の家庭に於ける仕打の餘りに無理なる事その一原因なる可し。主人か無理を云ふに之に逆ふとも出來す、さりとて之を行ふには迷惑なり、故に主人の目を、掠めて遂に此に到る也。亦た細君が意志の薄弱なるも其の一原因なる可し主人に向て明らさまに其の情實を陳ぶるを憚り、さりとて主人の言を服膺するとも爲さず、其の鼻先の小智惠小才覺を以て、彼れ是れやりくりを爲すに到る也。亦た一家の中に異分子の存在するも其の一原因なる可し、其の異分子を心から調和するとも出來す、さりとて調和せずして止む可きにあらざれば、遂に口是腹非の芝居狂言らしき事も出て來る也。



されば一家內に影日向の惡風を生ずるなからんとするには、別段六ケ敷事にあらず、主人たるもの能く家內の事情を察し、等閑にも無理かましき注文をなす勿れ。而して己が爲さんと欲する所、家內の人々が己に向て爲されんと欲する所、亦た己が家に向て斯く〳〵の事を爲す可しと欲する所は、徐々に相談し、說得し、其の同意を得、其の同感を得、其の同情を得て行ふ可し。細君たるものも亦た古の御殿女中か殿樣に事へたる如く、唯た其の眼前を胡麻化して、其の氣轉の中に主人を丸め込むが如き淺墓なる事を爲さず、面倒を厭はず其の眞實の心を用ひ其の主人に接し、評議を盡し、講究を遂げ、其の同意を得、其の同感を得、其の同情を得て行

ふ可し。
既に一家の双柱たる夫妻にして此の如くんは、其他は云ふ迄もなし。若しそれ一家の異分子に到りては無きに若くはなし、則ち食客、厄介者等の如きは成る可く居らぬに増す事なし。彼の雇人とも附かず家族とも附かぬ者は、或は止むを得ぬ事情よりして、或は便宜上より之を養ふ者あれとも、家風を壞る之に及ふものなし。一家は成る可く家族のみにて暮らす可し、特に純粹の家族のみにて。

今日我邦の富の度にては、舅姑別居も隨分面倒なり、されば先つ事實の上にて別居する樣にす可し。老人と壯年とは其の趣味も同じからざれば兩ながら其の幸福を保たんとするには、一家內に於て自治の制を取るを要す。左すれば影日向を容るの要なけん。

呉々にも注意す可きは、其の主人たるもの、內行治らさるが如きとあるか、甚しきは妾を置くが如きあらば、主人自から影日向の張本人とならさる可らす。亦た老主人たるもの動もすれは既に壯年に達したる男子を小兒視し、百事掣肘するか如きある時には、勢ひ一家に影日向を生するに到る、此等は別して慮る所あらさる可らす。

純粹なる家族、異分子を雜へさる家族、眞實を以て萬事を貫く家族、何事も相談づくにて行はるゝ家族、品行正しき主人と貞淑にして勤勉なる妻君を以て組織したる家族、老人は福々しく小兒は樂敷家族、何事も光明にして一家の內水晶箱の裡に在るが如き家族、一言すれは現世の天國此の如し、天國を支配する神の律法も、此家の家風に過きじ。而して一國の最善最良なる市民は、皆な此の家風中より生れ來るものと知る可し。

史談

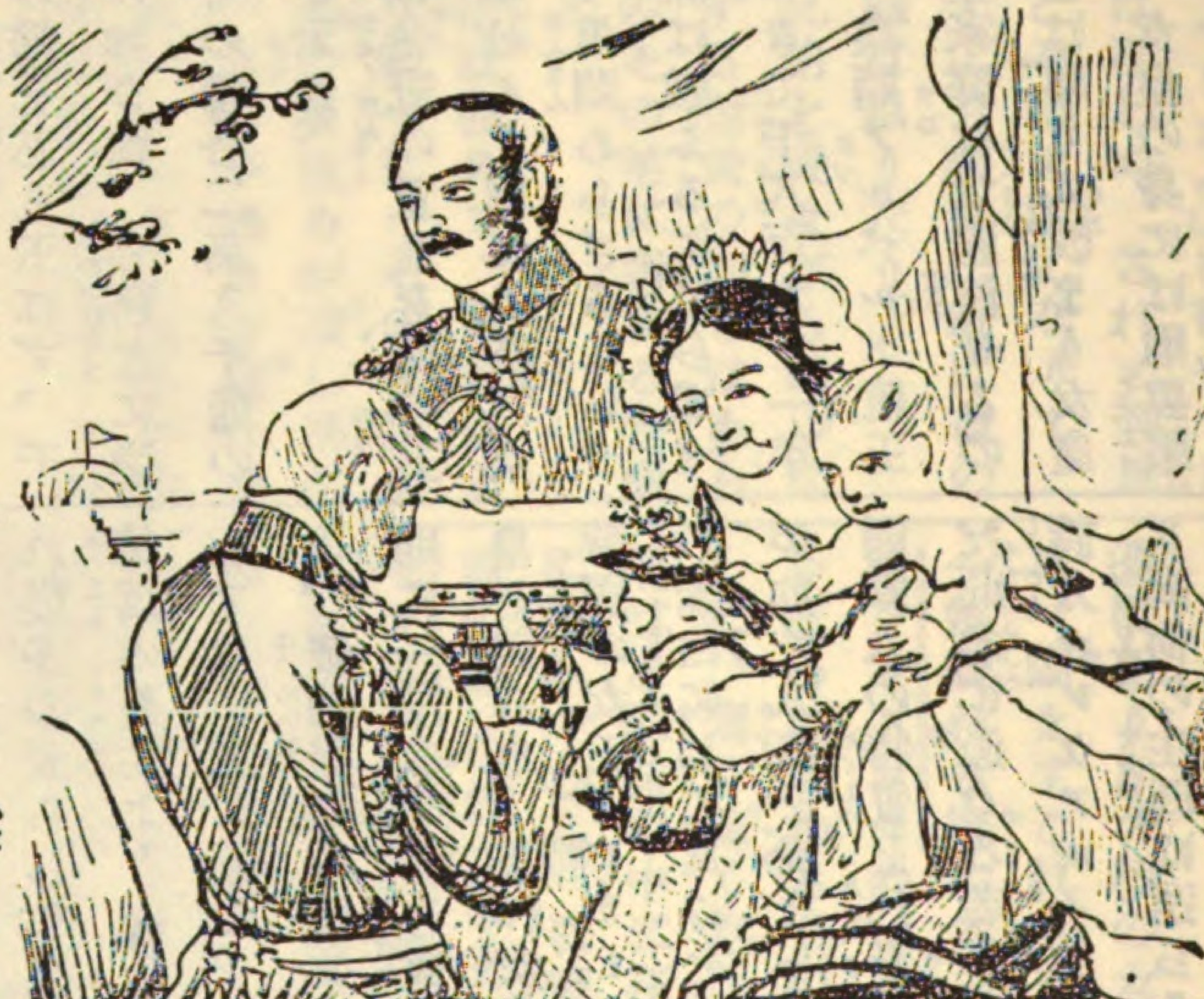
老女皇（續）

千八百三十八年六月廿八日ウエストミンスタア寺院に於て即位の大禮を行はる。女皇寶冠を戴き大禮裳を曳き寶杖をとりて堂の正面に一段高く搆へたる位に坐し、六百の貴族代る〴〵進みて奉賀をなす、儀式の莊麗なる近世無比と稱す。斯る莊嚴華麗の儀式の中心斯る大帝國の主として、猶二十にも滿たぬ少女の物靜かに獨り寶位に倚て坐し玉ふを見て、群衆の中淚落せる者多かりし。此儀式中九十の老翁なりけるロール卿奉賀をなすの順番となりて玉座の段階を上らんとせしに、踏み辷べらして段下に落ちぬ。女皇此躰を見て半ば立ちかけ玉ひしが、ロール卿再び段を上らんとして再び落ちければ、女皇は立上りて玉座の端まで二三歩進み出で斯くて奉賀を受け玉ひぬ。一場の些事實に英人をして女皇を愛するの念を倍せしめたり。斯くて五時間の儀式終りて儀仗肅々王宮に歸り玉ひしが、金車已に石階のほとりに達したる時、寵愛の小狗走り出で〻歡喜の猖々をなしければ、女皇は「アレ、ダッシが待つて居る」と叫びつ〻寶冠も禮服も王笏もかなぐり棄て〻、ダッシに水つかはすことに餘念もなくて在せしと。げにも女帝は猶少女にてましゝけり。

即位の翌々年アルベルト親王を皇壻と定めらる。親王は日耳曼コーボルグ家の公子、女皇母方の從兄、女皇と同年に生れ、人物風采共に堂々たる一個の好丈夫、王にもあらざれば臣下にもあらず定まりたる責任なけれども責任は山の如き困難の位置に立ちて、女皇を扶け人民に服せられ、近世稀なる賢君子と稱せらる。女皇と親王との間に皇子四人皇女五人生れ玉ふ。女皇も親王も其敎育には全力を擲ち、皇子皇女を淑女たり紳士たらしむるに止まらず、何事にかけても後れをとらざる可き男子たり婦人たらしめんとの目的を以て、オスボルン宮にては皇子等に煉瓦を燒きて自ら砦堡を築か

しめ、大工わざを習はしめ、或は田園を割り與へ農具を與へ園丁に就て園藝を學ばしめ、其動きの報酬として尋常園丁の受くる程の賃銀を各皇子に拂ひ、皇女達は宮中の離れ屋にて料理裁縫等の女工を稽古し、或時は女皇親王を此處に招待して手料理をすゝめ、或時は之を貧民に施しなどし、斯くて皇子皇女は不知不識の間に勞働は人の職分なる事國を治むるの大切なるが如く家を治むるの大切なる事獨立自活の重ず可き事金錢の重ず可き事等を深く習ひ玉へり。實に英國の王室は女皇を初めとし何れも位に居るの道と共に良民たるの道を知り、一朝奇運の手王室を倫敦宮城より僻村の茅屋に移すも、一人として自

女皇の抱き玉へるは皇太子ウエイルス親王、傍に立たるゝは皇婿アルベルト親王、俛して玩具な捧ぐるは老武者ウエリントン公



家の生計を營み得ざるが如き方なく、殊に皇女達に至りては正に父に似母に似て才あり力あり天晴英國婦人の摸型と稱す可き方々も少なからず。糸を紡ぎ針を弄び、子を育し女を敎へ、家を治め經濟を掌どり、勤勉にして堅實、節儉にして重厚、人に對しては徑直眞摯、物事を慮つては極めて周到、女皇は實に英國良家妻良母親の型を備へ玉へり。位に坐して公事に當るはもと女皇の好み玉ふ所にはあらず。クリミヤ戰爭の折女皇は叔父君伯耳義王レオポルド陛下に書を寄せて云ひ玉はく「アルベルトは日々政治事務を好む樣に成られ候へども、私は日々愈之を嫌ふ樣に相成候、私等婦人は人を治むるが爲めには造られず、善良の婦人は必ず斯る男子的業務

を厭ふ筈と存ぜられ候、」と。然も嗜好は嗜好にして職分は職分なり、職分は女皇の重んじ玉ふ所、左れば悲喜憂歡の間を一貫して女皇は國家の務を怠り玉はず、千八百四十八年歐洲に亂ありし時の如きは、外務省に達せるもの並に外務省より發するもの都合二萬八千通の文書を女皇は一々閱了し玉へりと云ふ。

アルベルト親王在世の間は女皇は金冠の重きを覺へ玉はず、嘗て一二狂暴の徒女皇を弑せんと圖れる時、女皇は記し玉へり「我儕皆厄難あり煩悶あらざるなし、然れども吾家内だに幸福なれば餘は數ふるに足らず」と。然も死の使は王宮の門をも叩きて千八百六十一年の冬倫敦市中霧に包まるゝの日、皇婿アルベルト親王熱症にかゝりて薨ぜられ、女皇の家庭は太陽沒せるの有樣なりし。此時より三十年、世は移り人改まり女皇の頭上髮雪の如くなりたれども、女皇の身には猶黑服を纒はれ、折々其唇より漏るゝ「今は吾ほとりには吾をヴイクトリアと呼び呉るゝ者一人だになし」との一句は如何に其淋しきかを語る也。

女皇今や位の上に五十餘年を過ぎて七十三の齡を重ね玉ひ、幾人より母上と呼ばれ幾十人より祖母君と呼ばれ幾多の愛らしき皇子王女より曾祖母君よと呼ばれ幾億萬の蒼生より我女帝陛下と稱せられ、猶矍鑠として位に坐し玉ふ。其治世の五十年間人物雲の如く起り、發明發見草の如く萌へ、榮光赫々として英國史中別に一段の光彩を放つ。英國は實に此時代を誇り亦女皇を誇る也。是れ女皇にエリザベスの雄才あるに非ず蘇國の女王メーリーのチヤームあるに非ず、其の生涯の潔白にして良心を重んぜらるゝ、其の子女を愛するが如く人民を愛せらるゝ、其眞摯徑直堅實重厚正に英國婦人の特質を代表せらるゝ、古來幾多の女皇后妃未だ此君に過ぐる者あらざれば也。

詩人マシウアルノルド曾て歌ふて曰く、王宮の中にても高尙の生涯は送らるゝものを」と。老女皇の一生は實に其適例也。(完)

友西呢の日錄（下）

蔽日生

彼の女はその日錄の成る毎に、之をかれに贈り遣りぬ。かれが死にたる後も尚ほ「在天のモリスへ」と書いつけつゝ、日毎にそれをば續けむとはなしぬ、されど到底勝へざりき。遂にはその誌すところ益〻疎くなりて、千八百四十年（天保十一庚子年）十二月盡日、筆は彼の女の手より零ちぬ、嗚呼その日錄は畢りたり。

世の姉妹たるものにして、その兄弟を愛せざるは少なし、されど彼の女がモリスに對する情愛の如きはあらず。ユーゼニー、ド、グエーリンのその弟に對する情愛は如何に切にして深かりしかな。

彼の女がレ、カイラに於ける生活は極めて、單純なるものなりき。彼の女が日錄の開卷第一に、その畜猫をもてあましたる樣を描して、「性惡の畜生めが凍し鳩を火に煖ためむとする間に奪ひぬ。哀れや鳩めが馴れそめてわが心嬉しうなりし束の間に、いらざる猫めが食ひ去りぬ。これにて此の日の事は過にき。」と云へるによりても明らけし。

彼の女の書齋はさゝやかなるものなりき、そを擴ぐるにはなみ〳〵ならぬことゝなりき。ポシユエツトの摸倣論、フエチロンの著作、コルチイル、ラシーン、アンドレ、シエニエル及びラマルチンの使徒傳、マダム、ド、ステールの書、佛譯のシエークスピーア、荒村牧師、スコツトの赤鉄兜等は、常に彼の女の身邊に在りき。彼の女は如何なる時、如何なる處に於ても、斷えずこれもて樂みぬ。或は寂しき野邊の彼方に一叢茂れる樫の木立に身を寄せつゝ、或は夜更けしラングエドツクの、冷かなる霧立ち籠めし山の此方に、おぼろに見ゆる月の懸りて、靑油流しゝ銀の板の如くに、薄く輝く空うち眺めて、開けし窓遣り惜しげに閉づる臥床の中に在りても、しめやかに考へ、忍び音に讀み、心靜に筆執りて、「神の前と唯だ一個の人の前にと、心のたけを瀉ぎ盡す。」と懷をやりては慰みぬ。

モリスの結婚はユーゼニーに取りては、大なる苦痛の種なりき。千八百三十九年（天保十年）五月四日に、彼の女が日錄に誌しゝところは、云ふべからざる愁訴をもて、處々涙の痕の乾きもやらぬ樣見えき。其の後かれが病みて歸るとの音信聞し時は、彼の女の憂慮は又た一層なりき。その頃の日錄に誌して云ふ、「かれ咳きぬ、かれなほ咳きぬ。此等の詞は恒にわが耳に轟きて、何處に行くも附き添ひぬ、木の葉を見ては冬の來

なむとするを思ひ、斯くて勞症の死を思ふ。」と彼の女は斯る恐怖をもてかれを迎へ、遂に空しくかれを遣りぬ。

これより彼の女の生涯は沙の如く爲り了りぬ、されど彼の女が生命の絃線、情愛の絃線、宗教心の絃線、智識の絃線、悲哀の絃線は、前よりも更に深く更に切なる音を發ちぬ。彼の女は斷えず『その愛するところの蒼白き顏』と『笑み、語り、苦み、死ぬる樣々の相貌を顯はす美しき頭』とを見き。嗚呼彼の女の胸はつぶれ果てぬ。

彼の女は常に同じ事を繰り返しぬ、「われはかれが洗禮を授けらるゝ爲に、わが住まりたりしゲーラックより家に伴はれて來し時に、かれの搖籃を置きたる同じ室の同じ處にかれの柩を見るに至れり。この洗禮は一家中にて誰のよりも最も喜ばれたる事なりき。われは大に悅びて次の日かれと共にゲーラックに歸り、この新しき小さなる弟に氣を奪はるゝ程嬉しかりき。その後二年を經てわれは家に來り、自ら縫ひたる上衣もてかれに被せ、家の北側なる兎園に誘ひぬ、かれは少しづゝ歩み出だせり――これかれの初歩みなりき、――われは悅び極まりて、こを知らせむと母の許に走り行きぬ、『モリス、モリスがわがてに歩み初めぬ。』――その日の事を想ひ出せば誰の心も裂くるなり。」

彼の女がその弟の不幸短命にして、苦痛の多かりける生涯を想ひて、之を傷み、之を悲むの情、その日錄の中に見るも、中々哀れなる事ども多かり。「憐れむべき最愛の人よ、汝は此の世に幸福を受けざりき、汝が生命は短く、汝が安息は稀れなりき。吁、神よ、われを支へ賜へ、爾の信仰の中にわが心を築き賜へ。悲しや、われは自ら支ふるに堪へず。われらは如何にかれを見しか、如何にかれを愛みしか、如何にかれに接吻ししか、――かれの妻と、われらかれの姉等とは。かれはその褥に氣息ついて、眠りしが如くにその頭を枕に置きにき。斯くてわれらはその墳墓、かれの終りの休息處に見送り祈りして又た泣きぬ。さる後再び此處に在り、かれが家を去りて、巴里に在りし時の如くに、再びかれの爲に筆を執りぬ。わが愛するところの人、わが愛するところの人は、再び外に地上に見じ、得べきか。」

彼の女はなほ安むぜざりき。「われは不幸の爲にくづされぬ。われはかれを見むと願ふ。われは斷えずこの惠を賜はむことを神に求む。心靈の世なる天は、われらを

距ること甚だ遠きか。われらを隔つる他の生命は、吁、幽玄神秘にして測るべからず。われは切にかれの事を憶ひて、その何處に在るを問はず、かれが身の上に起れる事は、悉く之を知らなむと願へり。われはかれに隨ひて第三の天に達し、心して惠みの座に留まり、又た苦の座に、——火の灣に過ぎる。わが神、わが神、否とよ。わが弟を其處に導びく莫れ、其處に導びく莫れ。してかれは在らず、かれの心靈、モリスの心靈は恐ろしき怖畏の中に、否とよ。心靈の苦惱に依りて清くなり、失望は癒やされて、半ば惡魔に掠められし精神の疑惑も、悉く拂ひ去らるゝ清き泉の路に在るか。恐らくはわが弟は其處に在りて苦み、その骸軀の苦惱の爲に、助けをわれらに求めし如く、悔改の悲哀の中に、『われを愛しむところの卿等われを助けよ』と呼ぶ。默り愛するところの者よ、祈禱に依りて汝を助けむ。われ行て祈らむ、祈禱はわれの力なり、われ終りまで能く祈らむ。祈禱。吁、死にたる人の爲の祈禱は、清き泉の露ならめ。」

悲しや、惠みある露は屢々零ちざりき、彼の女の心は滋々焦げぬ。彼の女の日錄の五月一日は斯くありぬ。

「年の中にて最とも樂しき月は歸りぬ、されど總べての光景變り果てにき』。彼の女は『槌の如くに心を擊てる、涙なき乾きし苦惱』に撞ち碎かれぬ。

「われは何事にも死たるなり。われは鈍き憂慮と、言ひ盡し難き苦惱との爲に死にたるなり。哀れむべき日錄竟に用なし、わが前に消え失せたるこの世に忘れられよ。われは再び生命を得るまで、神がこの葬られたるわが心靈を、その墳墓の外に甦らしめ賜ふまでは、遂にこを書かざるべし。モリスよ、最愛の弟よ、わが汝を得たりし時は斯くあらざりしものを。モリスの思想は最と清き欝悶の中よりわれを起しき、この世に於てかれを有ちしは、わが爲には滿足なりき。モリスと共に活きながら葬られむはわれには恐かなる業とは見えず。」

斯くて彼の女の日錄は、愈々疎くなりゆきて、千八百四十五年（弘化二乙巳年）八月二十二日の後には、遂に一字をも認め得ざりき。それより殆むと三年を經て、彼の女はレ、カイラに身まかりぬ。彼の女が死にしは、千八百四十八年（嘉永元戊申年）五月三十一日にして、彼の女が齢四十四歳の時なりき。

（完）

科學

月の話（天文學者の一室）

◉月蝕皆既　本日は月蝕皆既にして東京府下は午後十一時八分九秒より缺け初め翌日午前二時二十一分二秒に終る

との雜報、各新聞に掲げられたる日の朝なりき、講義終るの後、教師は其の教子を顧みて云へり『待ち設けたる日は來れり、御身が家庭にても聞きつらむ、今日は月蝕皆既なれば、今迄書物の上又は講義にて教へしことを實際に就きて說き明さん、今より少しく眠につきて準備をなし、夜の十時頃にまた來よ』と。

◎　◎　◎　◎　◎

望の月は既に中天に輝やき、清き眞白なる光を以て山、河、家、草、木、凡てのものを洗ひ、月の光の外には空なく、光の影の外には地なき頃、天文學者は、其の天文臺と定めたる一室に座を占めぬ。天文臺と云へるは名ばかりにて、實は其の家の上の小き建て出しに過ぎず。一條の光は上の窓より注ぎ入り、天文學者と其の傍に並へたる多くの器械を照し、幽靈の如き影を床の上に落しぬ。其の間より梯子の下をながむれば、下には大なる教室ありて、燭の光、輝き居りたり。

此の小さき天文臺は圓形の建物にて、壁に四つの窓を穿ち、其の屋根は繩にて引き、自由に動かし、左右に廻らすを得る樣に作りたり。其の半は「てんまど」にて、此の時は全く開け放ち、恰も好く月の動き行く道に對する地位にあり。室の中央に、「てんまど」に向ひて立てる最も長き管は天文鏡にして、床に固く打ち付けられたる堅固なる鐵製の枕の上に乘り、「ぜんまい」の仕掛にて戞々と音をなしつゝ、月の動くがまゝに動き、常に眞正に月の面を指せり。其の長さは六尺許りにて尋常のものなりしが、青白き月の光に照され、後の壁、上の屋根に大なる影を寫せしときは、さながら雲を衝く許りの怪物とぞ見へける。

此の器械を遙かに離れ、閉ざゝれたる窓の方の薄暗き

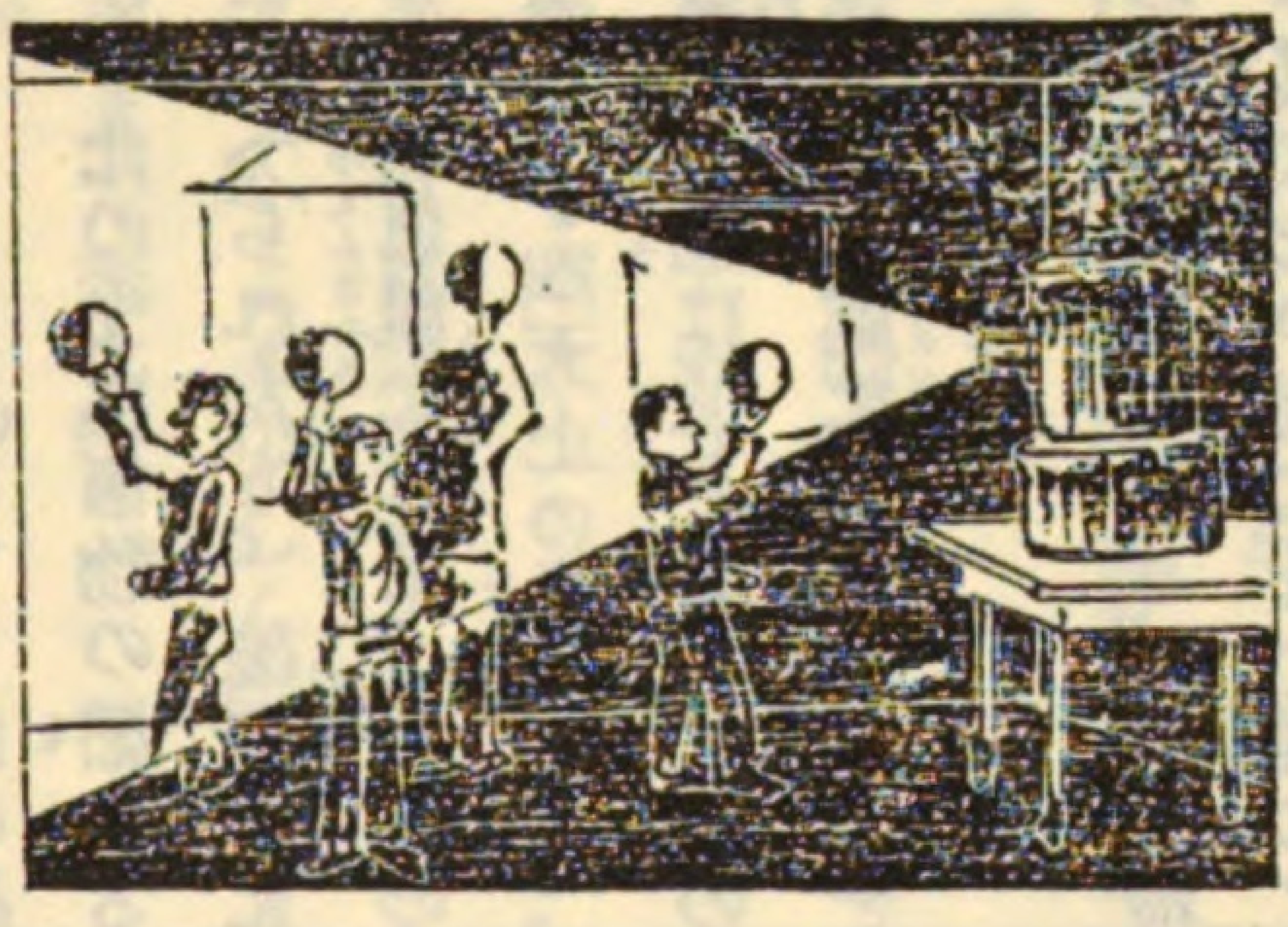
處に他の器械備へられたり。此は圓き鐵の机にて其の上に「チヂ」にて打ち付けたる三の管ありて皆な机の中心に向ひ、其の中心には六ケの三稜玻璃あり、各々眞鍮の足を備へ半圓形に並びたり。此の奇怪に見慣れざる器械は其の名を「スペクトロスコープ」とて、此の學者が色の「いろは」を讀み分け、此の光は何物の燃ゆるより生ずるかを確むるために備へられたり。後の方に頭巾を戴ける僧の立てる如きは寫眞鏡にして、此等の器械は學者をして、眼の力の達せざる天上の仙郷を見、樂しましめ、傍はらに立てる顯微鏡は彼をして、眼の力の及ばざる地上の仙郷を探り、其處に住める仙女と交はらしむ。

彼か此の明月の夜、此の室の椅子に坐し居るとき、彼の心は天文鏡に集まり、彼の思は此の天文臺を離れて遠く、遙か彼方の天を彷徨へり。彼は實に暫時の後起るべき面白き出來事を觀んと待ち搆へつゝあるなり、——月蝕皆既。此夜彼が殊に熱心に待ち望める故は如何と云ふに、『月蝕皆既』と云ふ二三行の雜報を掲げたる新聞記者の如き無學なるものは知らざるも、此の夜の月蝕には、月が我が地球の影に隱るゝと共に、一の星の前を過ぎり、其の星は突然、黑き月の皿の中に消え、暫時の後、流星の如く一方に突き出づる面白き事の添ひ居たるなり。

其處に坐を占めしとき、彼は常に不思議なる目鏡を取り扱ひ、また之を好む樣に敎へたる少年に此の現象を示さんと願ひしことと如何ばかりぞ。彼は學者なれども、徒らに獨り樂しむの外何も知らざる普通の學者にはあらず。彼は金に富み、また善き心に富み、勞役者の子弟の爲めに大なる學校を開き、其の校長となり、廣き地を擇んで都合好き家を立て、此處に數多下等社會の子弟を集め、其の報酬の多寡を云はず、書物を敎ゆるの外、實地につきての敎育を、己れの思ふ所ろに從がひて敎へたり。

天文臺の梯子を下り、下の大なる敎室に入れば、一見して此の尊むべく愛すべき人が、如何に其の目的に協はせんとて務めたるかを知るを得べし。其處には科學

上必要の器械及び各種の標本――其の中には少年の集め來たりたるものありき――備へ置かれたるのみならず、外に倘ほ幾多の金錢と勞力を費したりと見ゆる多くの解說圖を以て四圍の壁間を飾りたり。此の室に入りたるものは、一たび室內を見廻らせば、彼方の机には顯微鏡あり、此方の机にはナイフ、寫眞板などあるを見ると共に、また直ちにこれまで月に就て幾多の講話、研究のありたることを知るべし。黑板の上には下に寫し來りたる如き圖を描きたり。此の圖は暗室の中にて、手にて球を指し上げ、ランプ、或は幻燈のランプの前を廻る少年が、如何にして、月が地球を廻る狀を寫し、また如何にして月に盈ち缺けのある理を證し得るかを示したるものなり。ランプは太陽なり、球は



月なり、少年の頭は地球なり。先づランプに向つて球を捧げたる少年より始めば、球のランプに向ひたる半分は明らかに、後の半分は暗く、少年の目に入るは此の暗き半分のみにて、これ新月の有樣なり。其のまゝにて徐々と左の方へ動けば、明かなる部分少しづゝ加はり、四分の一を廻轉し背面になりて立てる少年の場所に至れば、明らかなる半面を見るを得べし、これ半月の形なり。夫より動くに從つて、第三の光を背にして立てる少年の場所に至れば、明らかなる全面を見るを得べし、これ滿月の形なり。滿月の時と新月の時とは、殊に注意して、球を頭より上に捧げざるべからず、然らざれば、新月の時には、ランプの光、球に遮さられて日蝕となり、滿月の時には、球、頭の影に隱れて、月蝕となるべし。夫より倘ほ左に廻るに從ひ、目に見ゆる明らかなる部分次第〳〵に少なく、十六夜、十七夜より晦日に終る。此の圖の外に、月蝕は何時、何故に起るかを說明せる圖、月の運轉する軌道は如何なる形なるかを說明せる圖、其の他くさ〳〵の圖を揭げた

り。

教師の説明と此等の圖との助けにより、少年等は既に月の盈ち缺くる有樣、其の表面の狀態、凸凹の地位などを知り得たり。されど凡ての穴、凡ての嶺が如何なる場合に如何なる形をなすべきかを詳しく知りたるは教師のみなりき。彼は今ま月蝕の始まるを待つ間、其の助手たる幸を得たる一人の少年を顧みて云へり、

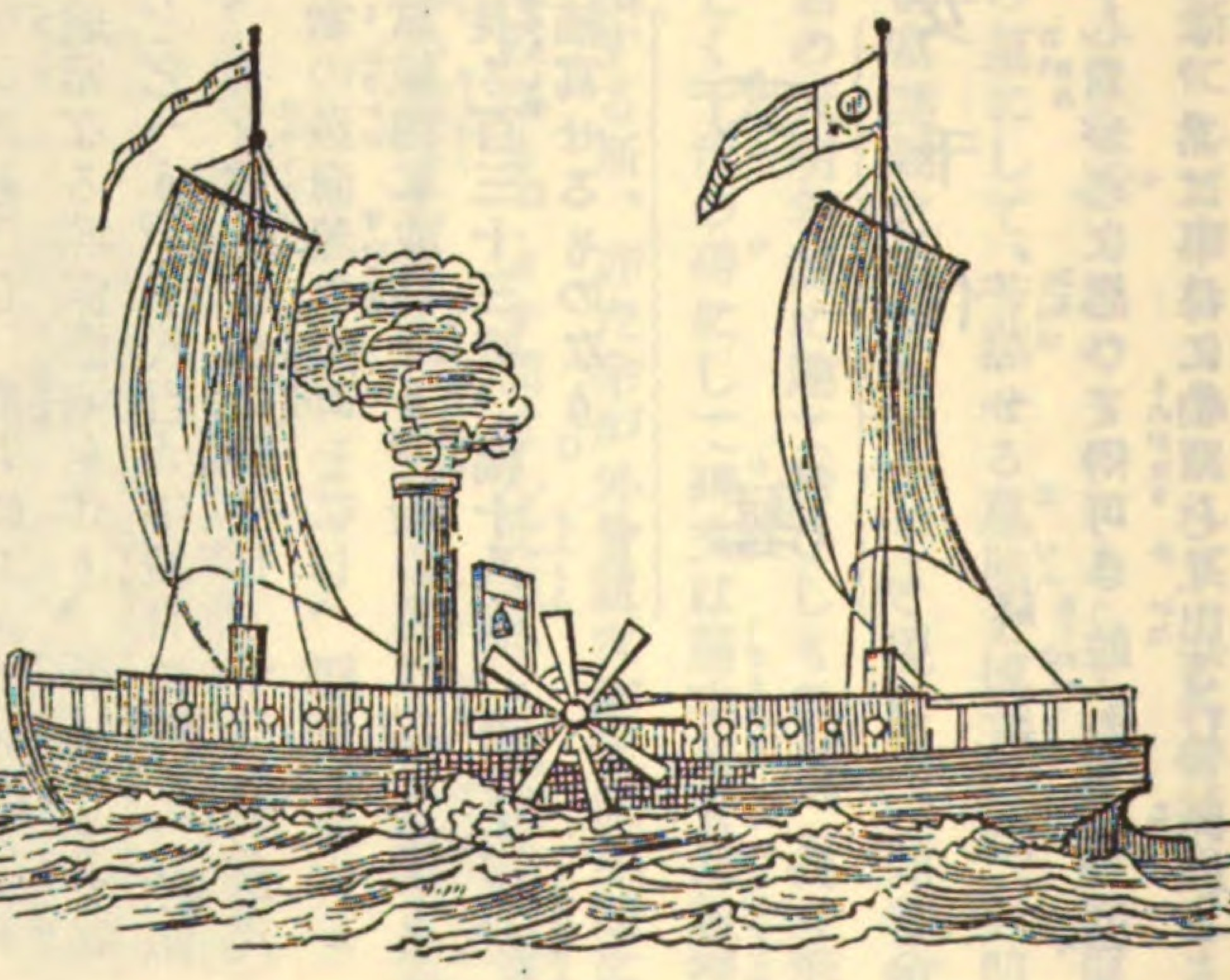
『月蝕の始まるまでには尚ほ半時間あり、今夜こそ余は御身に詳しく月の表面を見せしむべし、我に代りて此處に座し、月を見よ、其の間に余は重なる地理を解き示さん』

かくて彼は立ちて、常は教室に備へられ、此日のみ此に移し掛けられたるか圖の前に立ちぬ。（つゞく）

世界最初の蒸滊船

蒸滊航海の成功は近世學術上驚くべき一大事件なり。されば、航海するに足る程の水の湛へたる處は、何處として、蒸滊力を以て運轉する城の如き船にて通ふべからざるはなき今日となりては、世界最初の蒸滊船が如何にして作られたるかを知るも亦面白かるべし。

蒸滊力なるものを發明せし人は他に之あり、蒸滊力を航海に適用することを成し遂げたる人に至つては、世界の人は皆ロバート、フルトンなる人に其の大恩を謝せざるべからず。



ロバート、フルトンは亞米利加に移住せる貧賤なる愛蘭土人の子にして、今

を距ること殆んど百三十年前、耶穌紀元千七百六十五年、北亞米利加のペンシルバニア州に生れ、千七百八十六年英京倫敦に行き、夫より企業家として佛都巴里に渡りたり。次に譯載する書簡によれば、佛都に住せし時より、彼は器械力を以て船を行らんとのことに思を注ぎしことを知るべし。其の書に曰く、

……殆んど八年前スタンホープ伯も倫敦、グリーンランド船渠にて試驗されしも功を奏せず、小生も試驗いたし櫂を用ゆる方尤も善きことを知り申候。船の進む速力は、櫂、車の羽または其他の器械の面積が水につかりたる舟の舳の面積に於ける比例にてまた此等の器械を動かす力に比例するものに候、故に若し櫂の面積と羽の面積と相等しく、同時に同じ大さに動き候はゞ結果は孰れにしても同じことには候得共、櫂の方は返るときに空中を廻る故、抵抗力少なく、羽の方は水中に廻る故從つて抵抗力を增し、抵抗力は舟の速力の進むに從つて加はり候、夫れ故櫂の方得策に御坐候。……………………頓首

千八百二年九月二十日　巴里にて　ロバート、フルトン

フルチル、スキップウイス君　足下

翌千八百三年フルトンは巴里にて試驗をなし失敗せしが其の失敗は舟の構造甚だ脆かりし故なりとし、此時よりして成効疑なきを信じ、直ちにワット及びブルトンに注文し、適當なる蒸滊機關を作り、紐育まで送り出さんことを乞へり。千八百六年紐育に歸り、蒸滊機關を受取り、舟を作ることに着手し、千八百七年八月遂に世界最初の蒸滊船の船御をなし、紐育よりアルバニーまでの試航海に成功せり。船の名は『クラーモント』とて、長さ百三十三呎、幅十八呎、深さ七呎、其の形は此に描寫せるものなり。

文藝

孝女千代

蘇峯生

讀者よ、若し君が心に思ひて得可き貯あらば、溫和なる讀者よ、君は事毎に物語を見出さむ。此れより述べなむ所は短かし、君よ仇にな受けられぞ、此は物語と云ふ物語にはあらざれど、思はゞ君は其を物語とはなし得可し。

ウオルヅウオス

肥後より薩摩へ通ふ街道に、三太郎てふ三個の嶮しき坂あり、猿面關白が薩摩に攻め入りしも、此の道よりし。巨眼西郷が新政厚德の旗を推し立て丶熊本城下に打て出でしも、此の道よりし。その他慷慨男兒高山彥九郎、國民詩人賴山陽抔の肥薩を往來したるも、此の道よりし。特に封建の舊時に於ては、年々歲々、小鬢の剃けたる薩摩隼人が反りなき大刀を、棒差しに橫たへ、轡紋打たる槍指物を推し立て、山彥の膽さへ奪ふ氣勢にて通行したる、歷史附の街道なり。其の最後の一を津奈木太郎と云ふ、上下一里に餘る可し。下りて其の麓に近つけは、帶よりも狹き間を索り、玉より淨き岩淸水珊々として街道に沿ふて流れ、高さ百尺にも超る老杉帆柱の如く天を刺し濃陰重々、翠なす色は夏も日影を漏さぬ程なれば、誰しも難路に惱める旅客は、道傍の石に腰打懸け、彼等の爲めには生命の水とも覺ゆる、凋の淸水を掬んで枯腸を濕し、木の間より吹き來る涼風に汗を乾かし、無限の慰樂に入るなる可し。此所より數步を轉ずれば七八株の老松、龍の天に沖らんとして群る如く街道の左右に亂れ立つを見る。而して其の下た蔭に二個の石塔あり、一は平面なる自然石にして他は長方形の切石なり、自然石は古くして少しく大、切石は新にして少しく小なれど、共に普通の大さにして、別に人目を惹く程のものにあらず。自然石は即ち孝女千代の墓にして、苔蒸せる墓陰を摸すれば、天明某年、縣吏德富某建之の字あり〱と現はる、即ち余が大曾祖父君の天明年間に建て給ひしもの也。長方形の切石は同じく千代の碑にして碑文は熊本時習館教授近藤昌明の撰する所、亦た余が外曾祖父が天保年間に建て給ひしものなり。イサ問はん沈默せる二個の石塔は、南去北來の旅客に向て、如何なる無言の說敎を爲せしぞ。

扨も千代は何人ぞ、如何なる眼醒しき事をなしたれば、孝女とは申さる丶や、別段珍しき事もなし。イサその物語を始めん。千代は肥後國葦北郡津奈木鄕野中村農家の女、其の生れは延享年間と聞く、幼にして双親を失ひ、祖父母の手に育はる、性孝順六七歲の頃より祖

母の炊事を助け、祖父樵に行けは、鎌を持ち、田畑に行けは農具を擔ひ、甲斐〳〵しく立ち働き、心なき村人共迄皆な殊勝なる孝女かなと申しける。

かくして己も稍く成人したりければ、自から主として立ち働き、老祖父母を養ひ、恒に其の心を安んずるを怠らず。老祖父母が手助せんと云へは、其の意に任せ。山に入りて樵すれば、日向なる平地を撰び、此處を彼等の坐となし、枯木杯折り來りて之を束ねしめ、田畑に行けば、勞働薄き仕事を彼等に爲さしめ、恒に其の心を養ふを忘れず。

祖父若かりし時より馬を好みしも、家貧ふして購ふ能ず、千代其の心を察し、自から綿を績きて木綿絲となし、幾年々の辛苦を積み、遂に一匹の馬を得て祖父に與へたり。祖父の喜ひ如何はかりしならん。

千代は何も眼醒しき事をなしたるとなし。彼の廿四孝とか云ふ可き、或は子を埋めて、金の茶釜を掘り出たせりとか、或は雪中の筍、氷裡の鯉抔、情を矯め道に悖りたるとは一もなし。唯た祖父母は孫として千代を愛し、千代は祖父母として祖父母を愛したるのみ。愛は孝順を生す、愛は同情を生す、愛は親切を生す、愛は和樂を生す、愛は清福を生ず。千代は實に愛を播ひて清福を穫れり。

誰れ云ふとなく千代は孝女なりとの評判、其の近隣に起れり。遂に熊本なる藩主の耳に入り、其の老祖父母在世の際、年々二人扶持を與られたり、時に千代か二十歳内外なりし。而して其の老祖父母天年を終りし後も、千代は依然藩主より扶持米の賞に預れり、始終を通算すれば六十餘年に亘る可し、而して此の孝順なる千代は八十餘歳の長壽にて清き平かなる福なる生涯を結びぬ。鄉人其の德を紀念せんが爲め、今に到りて其の居村を千代村と呼べり。

長岡是容は、肥後藩の家老なり、資性忠亘直温、其の志風致を敦ふし、天下を濟ふに在り、嘗て巡回して其の墓側に憇ふや、墨斗より筆を取り出し、碑文の側に一篇の文を草し、末に左の和歌を留めたり、

賤の女が誠に誰もかへり見よ

道は心の外にやはある

家嚴其の文と和歌を錄し、之を是容と親交ある故元田東野翁に書せしめ、更らに一碑を千代の墓畔に立てんとするの志あり、東野翁の書既に成るも未た之を果さす、今春余の熊本に行くや、余をして其事を鄕人に諮らしむ、然れとも世務蝟集、遂に其の志を遂けずして歸れり。今に於て深く遺憾とす。

彼は横井小楠藤田東湖の交友にして、西鄕南洲の如きは、彼に師事せり、南洲彼を稱して曰く、『肥後の長岡先生の如き君子は、今は似たる人をも見るとならぬ樣になりたり』と。老西鄕をして斯くはかり傾倒せしむ、以て其の人品を知る可し。是容嘗て東湖に贈て曰く

何時かまた別れし人に逢坂の
関の東の空もなつかし

東湖答へて曰く

西東身は隔たれど御世の爲め
おもふ心の二つやはある

是容嘗て述懷の歌あり、

花見んと旅の宿りを出しかど
心ろ浮世の春風ぞ吹く

水戸烈公之を傳聞し、却て一首を寄せて曰く、

飛鳥山明日をも知らぬ武士の
花の散る世をあたに見なす那

其の横井小楠に於ける、殊に同藩の緣みあるを以て、切磋講究餘力を剩さす。中年學術の異同より遂に交を絕てり、小楠是容に抵りて曰く、『尊家を訪ふも今日限りと思し召されよ』是容黯然として曰く『君若し來らずんば、余は如何に淋しからん』と、小楠憮然として曰く、『固より同感に存ず、余も如何に淋しからん』と。小楠の春岳侯の召に應して越前に赴くや、是容竊かに其の懷を述へて曰く

中垣の隔はあれと隔なく
道の榮を祈りけるかな

本誌の卷頭に揭けたる、千代の畫贊は二人の交未た絕へさる時に際して、家嚴か小楠翁を介して、彼か染筆を請ひ給しものにして、彼欣然として之に應して曰く

賤か女か眞をうつすうつし繪は
　千代も曇らぬ鏡なりけり

嗟呼富もなき、學問もなき、位もなき賤が伏屋の乙女にして、如何なれば斯る大人君子の心を、斯くばかり動したるか。此の返答は讀者の胸中にある可し。

嬰兒（つゞき）

一一生

彼れは賑かなる事を好む、余が机に向ひ書を讀むとき聲を出して讀むときは、彼れ直ちに這ひ付け來りて、机の周邊に在る書籍類をかきまわすなり、余はこれをうるさしと思ふ毎に、家人をしてあちらの方にて太鼓を撾き笛を吹かしむ、彼れは其賑かなるを喜びて又た其方へ這ひ付け行くなり、

此頃彼れは太鼓を撾くことゝ、笛を吹くことゝを覺へたり、笛は吸乳器の如き形にでき居りて、彼れは初め乳を吸ふ如くに笛を吸ひ居たるなり、吹くことを覺へたるは此頃の事なり、太鼓は二十錢のものにて小兒の帽子ほどの大さなり、彼の翫弄物は大概一錢以下のものにて、二錢のものさへ稀なるに、今度二十錢の太鼓を買ひたるは中々の奢りなり、

一日彼の祖母は彼を連れて、親族某氏の病氣を見舞ひたるが、病人は其病氣の苦痛を形容して、横に臥せば肋骨が痛く、仰臥すれば胸が痛くなど言ひたる、其皺顔の伸縮、其身振りの俳優めきたるは、彼れの眼に餘程可笑しく見へたるか、彼れはケラ〳〵と大笑したり、病人も可笑しくなりしと見へ、病苦を忘れて笑ひたるが、面目を失ひたるは祖母なり、併し嬰兒の一顰一笑が禮法に背きたりとて、氣に懸ける者もなければ、彼の身の上は實に氣樂なるものなり、

彼れを上野公園内の動物園へ連れ行きて、珍らしき鳥獸魚介を見せたるとき、彼れは尤も喜びたり、先づ象の形の大にして奇異なるに驚き、虎の鐵檻中に狂騰せるを囃し、羊に紙切れを食はせる所ろを見て、羊の耳を摑まんとするなど、中々興あることとなりき、殊に小禽が樊籠中にて飛揚上下するを見て、手を伸ばして捕

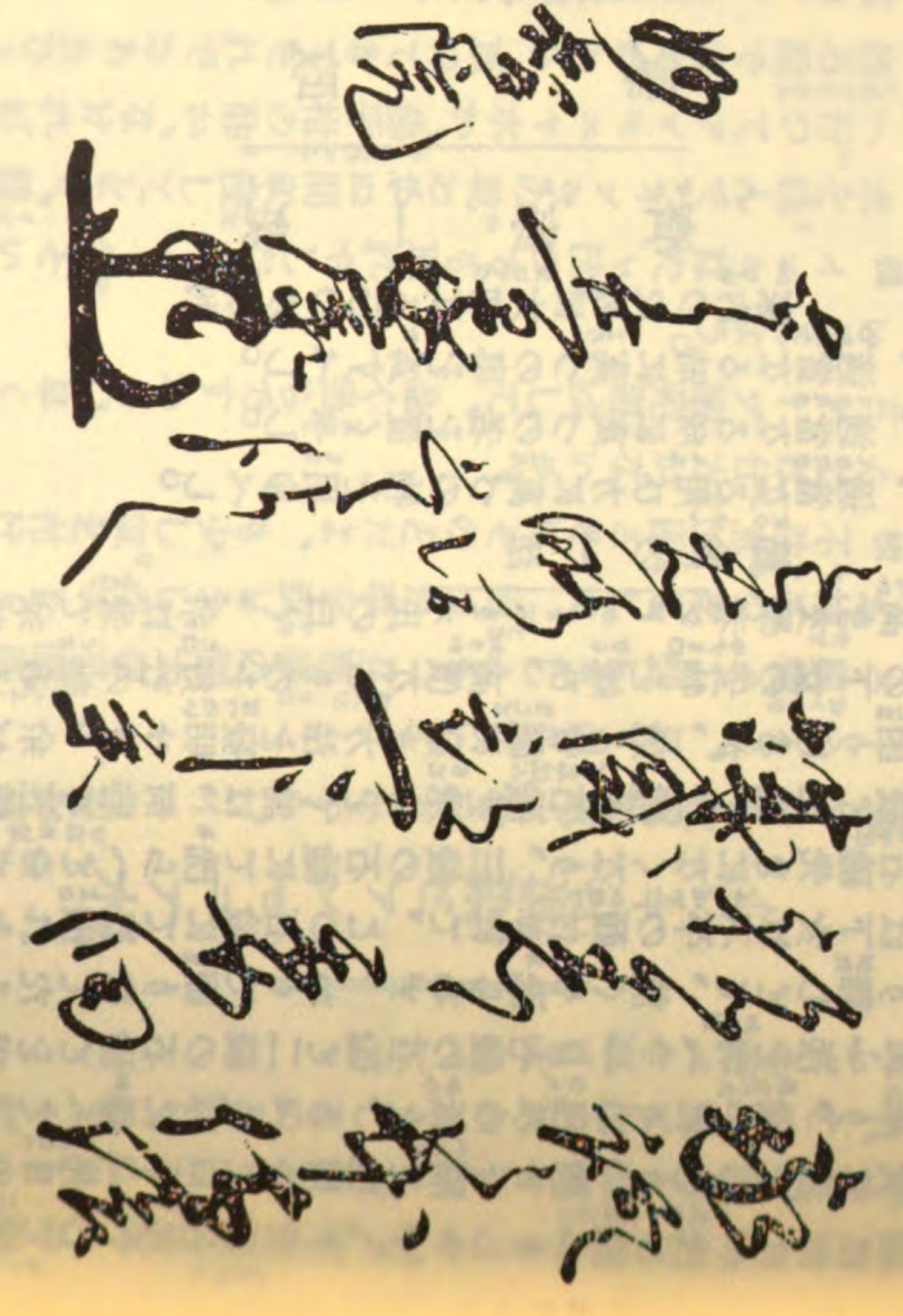
へんとせし如きは、無邪氣にして愛らしきこと此上なかりき、

十月七日は彼が生れてより二百五十四日目に當る、彼は此日を以つて種痘せり、左右の腕に六ツつゝを種へたりしが、右には三ツ、左には四ツ有効なりし、種痘後は肥立あしく、頭上に小腫物でき、「耳だれ」と稱して耳より膿を出す杯の事にて、毎夜深更に啼き（俗に夜啼きと稱す）、看護者を困らせたりしが、養生專一になせしより、追々快復して、此頃は前記の如く、太皷や笛もて快く遊ぶやうになりたり、

英雄の墨痕

（徳川家康筆）

之を心に取て之を手に注ぐ。其の形をなして巧あり拙あるは手の事なり、筆力の如何は氣象に關す。手は人を痩すべきも、氣象は人を痩さゞるなり。千歳の下其遺墨に對する者、眼あらば焉んぞ其人を見る能はざらんや。



庭のをしへ

かざしの花子

竹のはやしに　生ひ出し
竹の子見ても　知れよかし、
をさなき子等の　ゆく末は
庭のをしへに　よるてふを。
うはらの中に　生ひ立は
直なるたけも　曲りけり、
荒しかき根に　さき出る
なでしこいかで　匂ふべき。
空よりたかき　アメリカの
ワシントンてふ　名をきけば
たゞしき道を　數へにし
庭のうちこそ　忍ばるれ。
ひとりのほまれ　後の世に
たかき孟子の　をさな時
三たび住處を　遷しけん
母のこゝろぞ　有がたき。
四條なはての　はる風に
花よりもなほ　香はしき
名を殘しけん　正行も
庭のをしへに　よりてこそ。

家政

齊家一斑

家内のために大切なる三つの規則

一、適當なる時に萬づの事を爲すべし。
二、適當なる所に萬づの者を置くべし。
三、適當なる用ひ方に萬づの物を用ゆべし。

節儉の一法

名高き文學者シドニースミス氏の曰く、余は兼て余が家の下女の安物を嫌ひ、高價なるものを好むの癖あるに困りけるが、過る日誠に好き方法を發明せり。余が五錢と三錢と二種の石鹼を求めをく時は、何時も五錢の石鹼先きになくなり、三錢の石鹼にて洗らへと命ずれば下女は不平の顏付きにて、この石鹼にては穢れを去り難しとて、能くも洗らわず、かくて困りはてたる末に一法を考へ、一日七錢の石鹼と二錢の石鹼とを求め來り、陰かにその包みの紙を、わべこべに變へて、下女に渡たしをき、數日を隔て後問ひて曰く、『先日の石鹼は何れが洗ひ能かりしや』と、下女目を丸くして答

へけるは、『主人よ、そは勿論の事にて候、七錢の青き紙に包みてありし石鹼こそ、洗ひ能くもあり、早く穢れも落ちて、かくの如く美麗になりて候』。『さらば汝は以後その石鹼を用ゆること〻極めをくべし』と云ひければ、下女喜びてそれよりは、絶へず二錢の石鹼を七錢の包紙に入れしものにて、美しく衣服を洗らひ、大に余の經濟を助けたり。

出火の時の心得

又た先きの仝じ人の經濟話しの中に云けるは、『ある朝牛肉の脂肪のストーブの中に落ちて燃へ上り、其火筒の中に遷りて、今や大火に及ばんとせり。烟は卷き、臭氣は漸〻に增せり、パチ〳〵と云ふ音は恐ろしさを加わゆると共に、下女下男は皆惶わて〻爲す所を知らず、無益の騷ぎをなし合へり。余は下女に鹽を持ち來れと命じをき、自ら有り合へる古る毛ットを、水に浸し來りて、ストーブの火口に行き、今下女の持ち來りたる鹽を、ストーブの中へ投げ込み、急に火口に蓋をなし、濡れたる毛ットを以て、蓋の周圍を卷きて、風の入るべき處なき樣になし、次ぎに窓、戸等を閉ざして、風の通入を防せぎたり。かくて三分を過ぎずして、火は全く消へ、家も無事にして殘るを得たり、もし惶わて〻ストーブに水をそ〻ぐか、或は大聲に外人の救を求めて、家内を雜倒せしむるが如きことありたらんには、とても家は助すからざりしものを』と、ストーブに限らず心得べき事と云ふべし。

インキの濕染とアンモニア水

奥樣　ソレお重又た氣を付けないから、インキ壺が覆つているよ、早く起さないと……

下女　奥樣ドー致しましよう、旦那樣の御大切な禮服のお袖につきました、困つた事を致しましたナー。

奥樣　不注意で困るとはそのとだよ、も少し氣を付けなくては仕方がないネ。

下女　ドーゾ御免遊ばして、全く過ちですから、早く洗いましよう。

奥樣　インキはた〻洗つても取れやしないよ、急そいで水を汲んで、インキの乾わかぬ間に浸してをき、藥屋へ行つてアンモニヤ水か、佛手柑の酢か、なければ、酒石酸でもよいから、取つてきてそれでおあらひよ、其内アンモニヤ水が一ばんよいよ。

家庭衛生

リウマチスの用心

寒氣の増すに隨たがひて、一層の注意を要するは、リウマチスを患ふる人々なり、その痛みは一たびこれを病みたる人の能く知る如く、骨々節々だるきが如く、重きが如く、熱するが如く、冷ゆるが如く、外部より撫でたればとて、骨の痛みのゆるみ難く、隨分に困難なるものなり。之が最良の治療法は、患部を冷氣に觸れしめざる樣、フラネル若しくは木綿の切れにて能く包み、ソーダ或はボッタースを水に溶解して服藥し、且つ患部を甚だしく摩擦すべし、又ヨヂウムチンキを患部に塗るも多少の功あり。

熱病の看護法

熱病の兆は躰内の乾燥と、脈搏の急がわしきと、舌の白くなると、目の中のうるみたると、及び四躰の熱して呼吸困るしきとに由りて、之を知るを得べし。何種の熱病にても、熱を病める患者は、特に空氣の流通の好き處を撰らびて臥さしめ、又時々布を温き湯に濕して、躰を拭ふべし。食物は堅き物を禁じ、米の上湯、葛湯、牛乳、レモナーデ、及び燒パンを水に濕して用ゆべし。水分多き菓物は、少しは用ひて可なれども、肉類の如き刺激物は、醫者の免しを受くる迄は、決して食すべからず。熱病は概ね人の恐るゝ病なれど、一に看病二に藥と云へば、藥を用ゆるよりも、一層心がくべきは看病の法にこそ。

頭痛

頭痛に二種あり、一は胃より來るものと、他は神系痛となり。胃より來りたるものは一ダス計りの瀉利鹽を服用せば、大方は醫すべし。尤もその間燒きパン、ビスケット、米の上湯等の如き、輕くして消化の能きものを用ひ、大に散歩することを勉むべし。神系痛とは、時に頭の半分の痛む等のことあるを云ふ。こは濃厚なる茶を飲用し、靜に一室に安坐するによりて醫すること屡々あり、頭痛をやむ人は試み給へ。

調理餘談

馬鈴薯のビスケット

十二個計りの馬鈴薯を湯煮にして能くつぶし、味噌漉にて漉して塊を去り、未だその温りの冷めざる内、少

量のバタ、一サヂの塩、コップ半杯の砂糖、及びコップ半杯のパン種子を入れ、能く捏ねるに適當になる迄うどん粉を入れ、能く捏ねて花形に切り、暫らく温たかき所に置き、膨脹するを待ちて、火の強よきストーブにて焼くべし、尤も馬鈴薯は湯煮にしても、柔かくならざる如きものは、不可なるべく、又捏ねる時間の長き丈け、出來上りし時輕ろくして味よきビスケットを得べし。

ソーダのビスケット

五勺計りのうどん粉に、小サジ一パイの塩と、全量のバタを入れ、(バタの代りにクリームを以てせば美味數等の上に居らん)別に茶飲茶碗に微温湯を入れて、小サジ一杯計りのソーダを解かし、先きのうどん粉の混和物と混せ合せ、更らに幾分かのうどん粉を入れて、捏ねるに易き迄入れ度とし、捏ね上たれば、一分も早くストーブにて焼くべし。

白米のスチウ

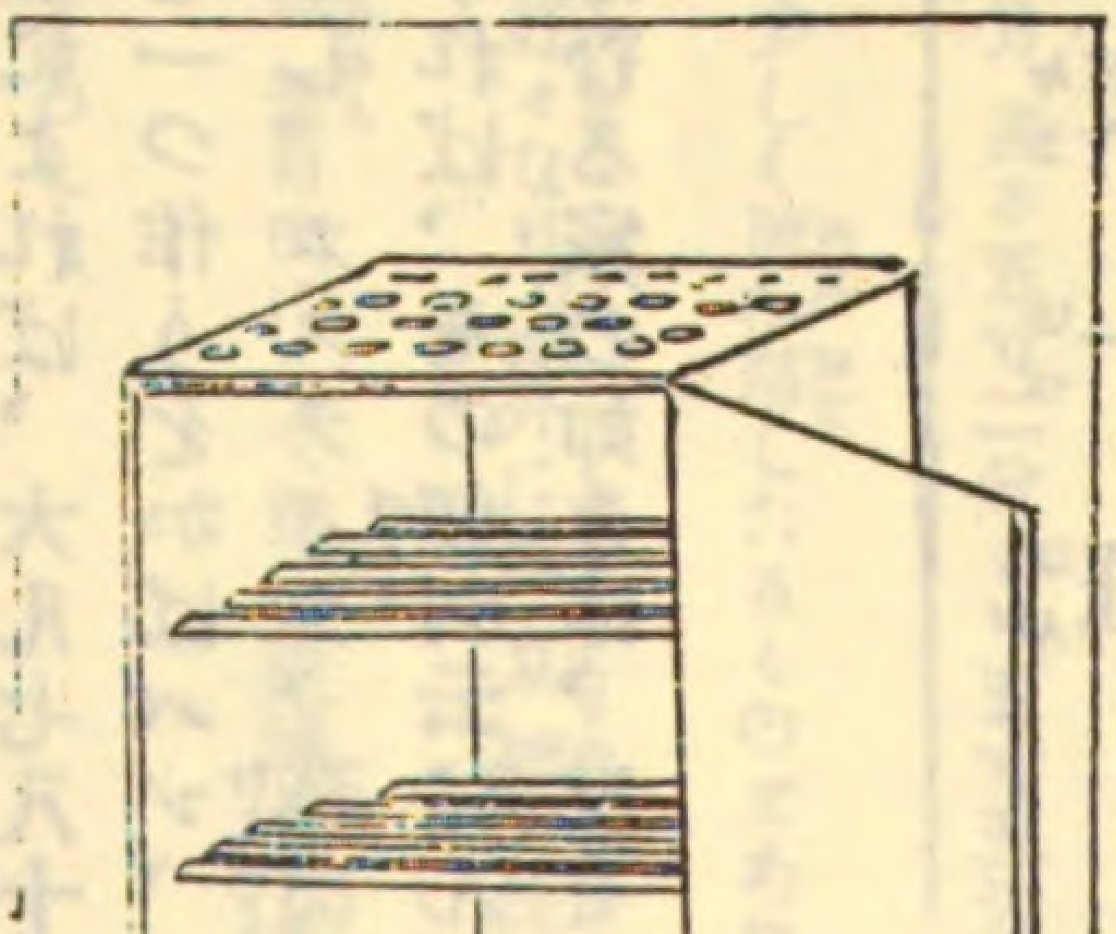
何種の肉にても、半斤計りを五分位の大さに切りて、二合の水に適宜の塩、砂糖、胡椒及び望によりて少量の酢を入れ合せしもの丶中へ、先の肉を入れ、又一握の米を其中へ入れて、三四時間火鉢にかけ、肉の柔かくなりし頃皿に移して食膳に供すべし。

魚肉のレモン焼

何種の魚にても、先づ二つに開らきて腹内を能く洗らひ、内外共に塩、胡椒をぬり、焼き鍋に脂を引きて其上にて焼くべし、かくて魚の焼けたるとき魚のみを取り去り、魚より出でたる汁の鍋に殘りたるものに、少量のうどん粉を混じ、レモン油をそ丶ぎて、火にかけて、粉の煮へたるとき、先きの魚にかけて食膳に供すべし。

新奇にして輕便なるパン焼器械（菓子、肉類の焙焼にも用ゆ）

先づ馬口鉄にて、幅、奥行、共に八寸(但し鯨)高さ一尺六七寸位なる箱を作り、圖の如く箱の上下に十數個の小孔を穿ち、孔の所は上下共に二重板となし、一引手を付けて、之れを引けば孔をふさぎ、之れを壓せば孔の明く様に作るべし、中の棚は二



段、又は三段、望みによりて作るを得べけれど、餘りその間狹きに過ぐれば、火氣の透徹不充分にて、結果好からざる故、高さ一尺六七寸の箱ならば、棚の數は先づ二つ三つを最良とす、その棚には小筆大なる鐵の棒を各一二寸づゝの間をへだてゝ箱の横面に打ち付けをくべし、箱の底部(即ち孔の明きたる所)の下は、空虚なれども箱の足の開かぬ爲めに、四方よりブリキの板を張り付け、旁々パン等を燒く時、火力の外に散ずるを防ぐに供す、(寸尺は人々の望みなれども假に之にその寸を付す)さてこの器を以て物を燒くには、先づその足の中の空虚なる所へ、火鉢又はコンロ等に火を入れたるものを入れ、燒く物の種類によりては、暫時上の戸をしめて、箱内の温まるを待ち、やがて開きてその燒かんと欲する物品を棚の上に並べ、再び戸をしめて燒くるを待つなり、パン、ビスケツト、茶碗むし等を燒くには棚の上段を可とし、肉類、菓子類はその下段を良とす、

この器を作るに付きて注意すべきとは、箱の戸の堅固にしめ得る樣に作るにあり、戸の間に隙多ければ、火氣消亡して出來悪しく、且つ物を燒くに長時間を要するを以て薪炭を消費することも亦甚だし、その價は家と所とによりて差異あれば、一概には云ひ難けれども、今日迄の二三の經驗によれば、大凡七八十錢位にて作り得べし、この器を一つ作りをかばパン、菓子パン、ビスケツト、茶碗むし、カステイラ、蒸肉等何にても手製に造るを得べければ、その便利云はん方なく、高價なる西洋料理を求むる家の如きは、又その經濟上に大なる益あるべし、

社交一斑

西洋小間物 其一（新橋南金六町一番地關口商店）

（婦人用品）

本年は舶來小間物は、爲替相場の工合により昨年より一割方も上直なりさいふ、今物品さ其代價を擧ぐれば

◎肩掛　駱駝毛織共模様は代價十圓より上等十五圓に至る、色は鼠、淡茶流行なり。同チル地は代價五圓より上等七圓迄、色は同上。同毛糸機械織は一圓より四圓迄、色は鼠、淡茶、藤、緑等なり

◎女帽子　形は山低の周圍大なる方、修飾は羽毛、花又は「リボン」等を用ゆ、色は黒、鼠、茶なり、代價二圓より六圓に至る

◎ハンカチーフ　「スカラ」(絹地縫箔)は縫模様種々あり、代價は一枚十錢より四五十錢まで。同麻の白無地「ヘム」(ふちとり)はダースにつき二圓五十錢より五圓までの代價なり

◎東髮ピン　「セーロイド」製は品いろ／＼、代價は十錢より一圓まで。ゴム製は當時品切

◉手袋　絹製は五六十錢より一圓、色は重に黒、薄茶を用ゆ。同「カスメヤ」毛製三十五錢より七十五錢、小兒用は二十五錢より三十八錢に至ろ、流行は皮色、茶又は黒なり。同「ダンス」用は色さま〴〵ありて絹製一枚代價一圓五十錢

◉履足袋　「カスメヤ」製にて代價五六十錢より八十五錢、色は黒

◉襟飾　品はいろ〳〵、三十錢より一圓上等五圓より廿五六圓まで

◉シャツ　毛製上等白一圓十錢より二圓四十錢まで、他の色物は下直なり。同木綿は四十五錢より段々、小兒用は三十錢より七十五錢。同小兒用毛製は白にて一圓より一圓五十錢に至る

◉花簪　草花等種々あり、代價は十五錢より四十五錢迄なり

其他婦人用附屬物品種々あれども爰には省きぬ。

西洋小間物　其二（京橋區南傳馬町三丁目十六番地大澤屋）

◉中山高帽子　上等一ダース四十五圓中等二十五圓並十圓、目下流行の新形は上等一ダース三十四五圓位にて緣の狹き品望み人多し

◉手袋　追々裡付の需用者多けれども、今の處にては上等一ダース二十一二圓中等十七八圓並十一二圓位のものにてキッド幷に鹿革一重薄手の品賣行よし

◉襟飾　上等一ダース十五圓中等十圓並六圓位にて長形幷に蝶形需用者多し

◉ハンカチーフ　麻地のもの極上等一ダース十二圓上等九圓五十錢中等五圓並三四圓、木綿地のもの上等一ダース一圓より一圓二三十錢中等七十五錢並五六十錢なり麻地賣行よし

◉テーブル又は其他の飾物　一個に付一圓より十四五圓まで、ブロンズ製動物代價の上地位のものよく賣れ行く

◉襟　上等一ダース三圓五十錢中等三圓並二圓五十錢、折襟立襟共に流行す中に就て幅の廣きもの賣行よし

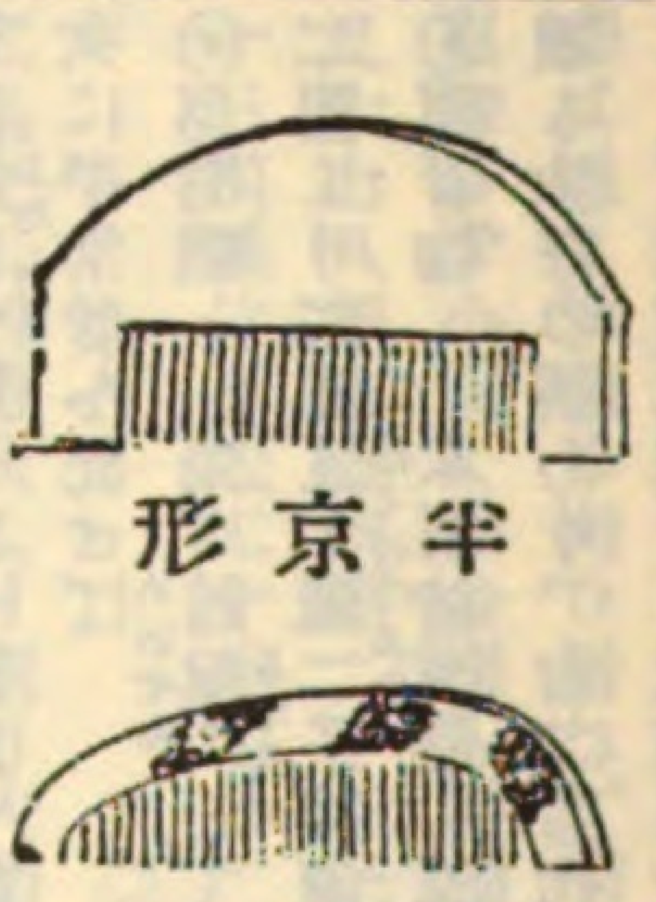
◉カフス　一ダース六圓位緣の角なる前後兩樣用ひらるゝ品流行

◉香水　一ダース九圓より十二圓十五圓十八圓二十圓二十四圓二十八圓位まで

◉シャボン　一ダース三圓六十錢より四圓廿錢四圓八十錢五圓四十錢六圓九圓十圓八十錢十二圓十五圓十八圓位まで

日本小間物（京橋區尾張町二丁目七番地相摸屋）

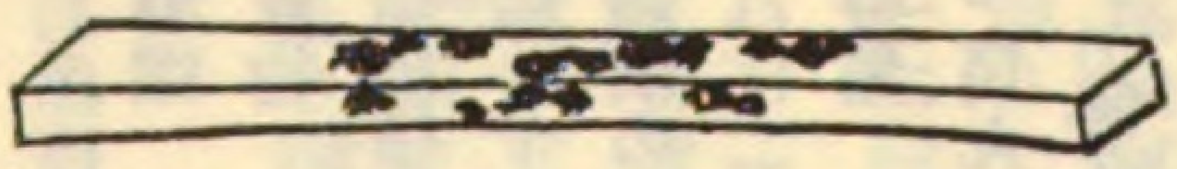
◉櫛　當時最も流行は本甲半京形なり、此形は利休より二三分も櫛胸高く、十七八の令孃方には、横三寸高さ一寸一分を最も好さし、廿歲より廿五六位迄の婦人方には、横二寸七八分高さ九分五厘乃至一寸を最格好さす。蒔繪には從前の都牡丹（お初形）第一位を占め、政子形之に次ぐ。「メラフ」の鬢櫛は以前は笹形はやりしが當時は達摩形最も流行す、利休形は全くすたれたり



半京形

達摩形

◉笄　「アラレ」形を最流行さす、廿歲前後の婦人方には切口三分二厘さ四分、長さ五寸二分より五寸五分まで大に宜し、且角さ少しく面を落したるものさあれども、これは人々の好々なり。此外に車立兩天流行す、これは兩端拔差自由にして重に銀臺メッキ、彫は菊或は蘭評判よろし



アラレ形

◉簪　銀簪祇園形(蛙脚)玉入物重に流行す、玉は種々ありて第一珊瑚金彫、鐵彫、推朱彫を佳とす、本甲珊瑚玉の祇園形は、本甲半京形の櫛、同「アラレ」形笄と揃物なり、近來昔に返りて銀の平打も弗々流行す

◉櫛笄簪の代價　は本甲にて三品揃十二三圓より其上は望次第百圓迄。蒔繪は櫛と笄の二品にて一圓より十五圓迄。贋鼈甲は四方張三品揃二圓五十錢より十圓迄中等には此處實口好し。銀簪は五六十錢より二圓迄、同玉入は五六十錢より十圓までなり

◉帶留　打紐にて巾は三分前後、色は利休茶、淡柿等、黒に赤又は白の菖蒲打流行、綾竹打も可なり。金具は金銀寶玉を以て粧飾したるもの種々あれども、本年は何故か金の菊又は素銅の菊流行す、七寶燒も珍奇なり。帶留代價は一圓より二十圓迄とし、銀臺金メッキの分なれば一圓より三圓まで、様々の品柄あり

日本冬服及洋服　（日本橋區一丁目白木屋商店）

前號の誌上に流行冬物の大略を記せしが本號には其代價及中等物と流行の洋服及代價を掲ぐる事となしぬ、

◉男羽織　魚子織は七八圓。市樂七八圓。縮緬は十圓前後の處。羽二重五圓ゟ十圓。紬糸織六圓五十錢より十三圓。節絲織三圓五十錢ゟ五圓。結城紬は五圓五十錢より六圓

◉同着物　品は大抵羽織と同しければ對照すべし。京御召は七圓五十錢より十圓。同紋織は十圓五十錢より十二圓。前號流行の中に洩れたる大島紬七圓五十錢八圓上等八圓乃至十二圓。一樂紋織は此處頗る面白し價八圓五十錢より十圓。八端は七圓五十錢より九圓

◉同帶地　重に博多二圓五十錢より四圓上等五圓ゟ八圓。繻珍は六圓五十錢ゟ八圓まであれども幇間又は落語家俳優の類にのみ行はるゝなり

次に

◉女羽織　黒縮緬八九圓。小紋縮緬六七圓。色縮緬七八圓

◉女着物　婦人方の買物の便利の爲め三揃を積りて價格を擧ぐれば。鼠縮緬摸様三枚重三十圓より三十五圓まで。上着を鼠縮にして下着を更紗縮緬とすれば三枚重にて廿八圓より三十三圓。上着縞物にして下着を更紗縮緬の二枚重とすれば十八圓より二十三圓までに出來。若し三枚重とすれば二十四圓より二十八圓までなり

◉同帶地　繻珍の丸帶なれば十圓より十八圓上等は二十五圓より三十五圓。同九寸は三圓五十錢より五圓、片側は何か流行品を見はからふも面白し。博多の九寸は三圓より四圓五十錢。水波琥珀は片側四圓五十錢。同丸帶十三圓より十四圓五十錢迄序に小兒物を記せば女物糸錦中帶六七圓より十圓、十五圓より二十圓、これは幅により價格に相違あり。男小帶は博多一圓より一圓五十錢までなり

次に平常着を記せば

◉男羽織　先づ銘線にして價は三圓五十錢位。次は瓦斯二子なり此價二圓より二圓五十錢二子は價七八十錢

◉同着物　本場結城最も流行、次は瓦斯糸結城(博多結城なり)にして頗る珍奇の柄あり、右二品代價一圓八十錢より二圓五十錢。次は博多紬にして代價二圓より二圓三十錢、下等は例の二子なり代價七八十錢

◉女羽織　は別に是と申して取立て書記すべきものなし、前記男羽織の銘線か瓦斯二子を用ゆるか、婦人方は餘り縞物を用ゐされは、次に

◉女着物　に遷れば。山糸織流行の第一位を占む。次は縞八丈右孰れも代價三圓より四圓五十錢なり夫より。以下は秩父銘線最も好適し、價は二圓三十錢より三圓、次は前記瓦斯糸結城にして佳美の縞柄いろ〳〵あり

洋　服

洋服は昨年に比し稍好景氣にして、價格は昨年と大差なきも少々は上向けり

◉モーニング　は黒の綾羅紗、ヅボンは茶又は鼠の堅縞流行、形は襟開少々大きくなりし傾あり、代價普通十五六圓上等に至りては二十圓、次は

◉脊廣　形は從前の通り、色は淡鼠或は淡茶の格子縞、新形は両釦上衣前角形、右代價普通十二三圓上等十六七圓

◉フロック、コート　地は重に綾、形は襟開狹き方流行、代價普通十七八圓上等二十二三圓

◉オヴワー、コート　丈は短き方にて無地、色は淡茶、淡鼠の類最も流行、價十二三圓より上等十七八圓

◉鳶形外套　普通物は縞羅紗、スコッチ類にして、地色は淡茶、縞柄は荒き格子流行、代價十圓より十五六圓まで、上等は縞の綾羅紗にして色合は前記同樣、此代價二十圓前後なり

日用品物價　（十一月十日）

東京市中は何れに行くも軒緻き實に八百八町の大都府なれば日用品小賣相塲も處と店とにより多少の差違あれども或る物價通に聞けば物品にも依れども惣じて塲所は塲末に比し品物善くして價高く山の手は下町より品落ちて價廉からず、麹町の如きは殊に著しき差違ありといふは貴族的の住居多きに基すならむされども還は一槪には申されず山の手とても隨分品物を撰み勉強専一にする店もあり次に掲ぐる物價は大抵東京の中央日本橋近邊にて得たるもの也

◎白　米

●一等米　九升二合●二等米　九升六合●三等米　九升九合●四等米　一斗〇四合●五等米　一斗一升

右は標準小賣相塲なれども本品は處と店により三四合乃至五六合高下に賣る

◎大麥、小麥、挽割麥

大相塲に大したる變動なし小賣一升代大麥四錢小麥五錢六七厘挽割麥五錢七八厘乃至六錢五厘迄

◎薪と炭

薪は追々季節に向ひ居れば需用も多けれど相應に荷廻りもあれば差して引締らず小堅く保合炭も同樣とて小賣相塲は薪一圓に付き●堅木大把長尺十七八把●雜木同二十五六把位、炭は●ドガマ大俵四俵●堅炭大俵三十三四錢位小俵二十錢内外

◎石油と種油

二品とも前月末より据り大相塲にて石油はホーキ、チヤスタも一箱（二斗入）壹圓七十五六錢小賣は石油一升十錢種油は二十三錢

◎醬油と味噌

大相塲味噌は氣配宜し、醬油は近日産地より出荷多き爲め下落、小賣は●醬油は一升下二十錢内外より三十錢●味噌は普通用赤（田舍味噌）一貫目二十二錢位白は二十四五錢

◎鰹節と鷄卵

鰹節は在荷澤山にて賣行鈍く爲に不氣配鷄卵は例年此頃は安直を顯はす時節なれど品拂底ゆゑ下落せず、扱小賣は●鰹節(百目に付)上三十錢乃至二十五錢中二十錢乃至十五錢下十三錢乃至十錢龜節は二十錢乃至十三錢●鷄卵は大玉二錢中玉一錢五六厘小玉一錢内外の相塲

◎魚　類

これは魚商になり「カケ子」あるものゆゑ日本橋の河市相塲を擧げむ、但

し不漁にて惣体に引締れり●鯛目下一尺六七十錢位●小鯛十錢内外●シビ餉(一貫目に付)四十錢●同キワダ(同)六十錢●同目鉢(同)三十錢乃四十錢●秋刀魚一尾一錢内外●鰯一錢に五尾●伊勢海老七八錢●猛子五六錢

◎青　物

此相場は日々著き變動なきものなれば神田の市場で買ふも近邊の八百屋にて買ふも格別の差違なく却て田舍に近く住む家の細君こそ取立の野菜を得て幸福なり、唯今おいしきものは大根、蕪、漬菜等なり

◎牛乳とヘルス

牛乳は麴町飯田町の北辰社の分を最良とす市内何處にても配達し一合代價三錢五厘又麻布霞町には赤十字社用の牛乳を賣捌く所あり一合代價三錢其他各所にあれども目今牛疫盛に蔓延の摸樣あり芝白銀品川最も甚烈を極め京橋區にも進入したる由なれば此際飲用者は宜しく注意あるべし●ヘルスは經驗したる人の話に牛乳と等しく大に身體の滋養となるといふ代價六合分十六錢郵税二錢

◎初　蜜柑

沖の暗いのに白帆が見ゆる、紀の國蜜柑船は未だ來着せず、來着したるものは雲州蜜柑なり初相場より一箱に付き三十五六錢これは日本橋四日市問屋の相場

團欒話叢

英雄と家庭

チャールス大王小供の留守に堪へず

チャールス大王の父君の小供を愛し給ふとは、世にも稀れなる程にてありけるが、父君は其小供等の居らざる所にては、如何なる美味ありても、決して食事を爲さず、又小供の行かざる時は、何れへも行き給わざりき。ある人父君は如何なればかく多くの姫君を嫁せしめず、皇子を一人も他國に出して、學問を爲さしめ給はざるにやと問ひければ、余は皇子姫達を外に出だしては、寥びしき留守を堪へ得べくもあらざればなり、と答へ給ひしとなん。

アゲシラス木馬に乘る

彼の戰爭好きにて名高き、古代のアゲシラスは、家の外にては荒ら〳〵しき武者なるにも似ず、一度家の敷居の内に入るときは、見更ゆる計りの柔さ〳〵しき好戯の男子となりて、その小供と仝し樣になりて戯れ遊ぶが常とせるが、ある時木にて作りたる、小供の遊び

の馬に乗りて戯れ居りたるを、友人の見付けて、この英雄の名も高かきアゲシラスにして、かゝる遊戯を爲すかとて、大に驚きしを見て、之に答へけるは、『待ち給へよ、余は卿が自分にて人の父と爲り給ふまで、その御嘲を世に吹聴するとを暫時卿に預けをくべし』と、此くて大に笑ひたりと云ふ。

ソクラテス人に嘲けらる

大哲學者ソクラテスも、嘗てアゲシラスと仝じ嘲りを受けしとありて、答へける樣『卿は父親がその子供と戯るゝを笑ひ給へど、そは道理なき事ぞ、卿は未だ人の父たる者が其子に對して有する愛情を知り給わず、又その愉快は、卿が子を持ち給ふ迄解し得さるべし、卿が人の親となり給ふときには、今余に向て嘲り給ふその毀りは卿に歸るべし』と眞面目に答へけり。

カトー息子の衣服を更ゆ

有名なる羅馬の大政治家カトーは、最も忙はしき時にも、その息子と入浴し、その衣服を自ら着更へしむるとを欠かざりき、息子も今は生長しければ、或る人見兼ねて、『經驗ありて忠良なる一人の僕を、御子息のために御周旋中すべければ、その御世話を御托しあるべし』と云ひければ、彼は頭を左右に打ち振り、『否とよ余はその僕が、息子の耳を引きて嬉からさするともわらんと、心配に堪へず、且つ余の外、何人も彼に何物を敎ゆるとを好まず』と云ひけるとぞ。

家庭小話

其一

山田太郎と云ふ、本年十三才の少年、今しも小學校より歸り父の前に至り、『父上、只今』、父は何時もながらやさしく『ヲ、太郎歸りしか、シテ今日は平日より少し遲かりし樣なるが』、太郎はかばんを肩より卸しつゝ



『然り、父上、今日は洒掃番なりし』、父は直ちに『太郎、明朝より御身自身の部屋と部屋の前の庭は、自身にて掃ひては如何に』、太郎は猶豫なく、『父上、承知せり、學校の先生も申されぬ、朝早く起き出て、運動がてらに庭掃くは身躰の爲に宜しと』、父は少しく眞面目になりて、『太郎よ、父は「がてら」と云ふ事を好まず、庭を掃く事、部屋を洒掃する事、太郎が朝の仕事とせよ、

吾家の源二は運動がてらに米をつかず、父は運動がてらに田を作らず、之れ皆な、爲さねばならぬ仕事と心得て力を盡して爲すなり、されど其の內に、をのづから身躰の爲に適ひ、父も源二も肥へふとりて達者なり、太郎よ、先生は運動がてらに庭掃けと申されしか、父は仕事と心得て、力を盡して庭を掃けと申す可し、此の世にはがてらに爲す事決してあらず、其れは昔の殿樣の事ぞ』、太郎は、愛らしき眼にて父を見あげ『父上よ、承知せり』と云ひさして、何にか他に言ひたげに笑へば、父も笑ひて、『太郎、何にか』、太郎は『英書の字引求め給はれよ、これからは、下讀して來れと、先生が申されし』、父は喜ばしげに『太郎、御身は早や字引を用ゆる程に上達せしか、求めて進ぜん、勵げめよ』、太郎は飛び立つ程うれしく『父上、さり乍ら茲に不思議の事あり、江川の父樣は一郎樣が字引求めてと願ひ給ひければ、非常に叱り給ひて、英學なんど、余計な事とて遂に字引は求めさせ給はずと一郎樣の今日、學校にて申されし』、父は暫し考へて、『なるほど、父も左樣思ひし事もありしが此の前の日曜日に市村先生の參いられての話に、近頃は亦、以前と引きかへて、英學を無用の者の樣申す事流行すれど、之れ誤れり、新らしき智識と新らしき道德を得んと思ふ者は、必ず新らしき學文によらざる可からず、さきに流行に連れて英學を始めし者も、思ひしよりむつかしき者なりしゆへ、多くは半途に挫けたり、流行の反動が元となり、輕薄と怠惰が之れを助けて、斯くは不評判とはなりぬ、されど之れ誤れりと、此の先生の言葉道理あり、父は新しき者を好む、叉た太郎を怠惰者と思はず、能く耐へ忍びて學べよ』、太郎は父の奬勵を受けて、深く感じぬ、誠や、學校の敎師が百度の敎よりも、智識あり、溫愛深き親一言のはげましの方、小兒の心には幾倍かの利益あり。」

太郎は自身の部屋に入り、書籍など、正しく、置く可き所に置き、再び部屋を出で、此所彼處見廻せど、母も姉も見當らぬに心付き『父上、母樣と姉樣はいづこに參ひられしぞ』父は膝を打ち『ヲ、忘れたり、今日は余り好天氣ゆへ、母樣と姉樣は、つるを伴れて、後の畠に芋ほりに行かれしぞ、太郎が歸らば左樣申してとの事なりし』、太郎は小躍して、うれしやと叫ひ、草履引きかけ、裏口さして駈出しぬ、秋の日麗らかに輝き、空すみ渡りて、妙なる光、野にも山にも滿ち、まことに田舎の靜けき景色なり。林を隔てゝ太郎の聲、女の笑ひ聲、手に取る如くに聞ゆ、

(未完)

催眠小話

まだ風寒き春の雪漸く霽れたる朝、炬燵に凭る祖母は兒孫を擁して昔譚りし、秋の夜長のつれ〴〵に心ある阿母は燈下の針をとゞめて未來の成人の爲に世のことわざを説く。此時に當りて彼れ可愛ゆき傍聽人は如何に眸子を動かし眉を昂げて其小き胸に欽慕の靈火を燃すべきぞ、又如何に其早蕨の如き拳を揮て小英雄を名乘りつゝ濶歩を學ぶべきぞ。一場の史話の渠等が嗜好性格を左右する力の大なる、古來の偉人が寢物語若くは繪草紙の上より其非凡なる生涯の門出をなしたるを見ても知るべし。世の父母たるもの何ぞかの話好きなる渠等に向て、其夜〳〵の催促に應じて偉人烈婦の事蹟を物語ることを吝しむや。渠等が睡むたげなる絲の如き眼の、忽ちに史話に入てぬば玉の黒き眸子を旋轉するを看よ。寢物語は實に世の父母たるものゝ最も意を用ゆべき敎育の一なり。

川路左衛門尉

德川氏の末に於て江戸の士といへば悉く女の如きものと人は思ふなるべし。去れども中には武骨稜々と聳へたるものもあるなり。川路左衛門尉の如き幕末一二とも呼ばるゝ名士だけありて、渠は啻に政治家として大なる人物たりしのみならず、武事の心掛けもなみなみの士にてはあらざりき。

渠は壯年の頃より死に至るまで日課としけることあり、

渠は毎朝鷄鳴を聞て乃ち起き出でぬ。起き出るや直に短き袴を穿ち、木馬に跨り蹴り或は躍ること三百回ばかりす。次に筋鉄入の木刀を揮りまはすこと三百回。大身槍をしごくこと亦三百回。それより直胤の刀三尺二寸あるを三百回ほど揮りまはし、後室に入りて正坐しつゝ書を讀むなり。これを其日課とす。而して渠は又毎月六たび必ず双刀を帶び芒鞋を穿ち洋銃を肩にし銅錢の重さ甲冑の如くなるを帶につけ以て其下屋敷の庭なる築山を上下し凡そ三里程にして已むを常となしぬ。これは陶侃が甓を運ぶの意なりといふ。

去れば渠が幕末柔弱の世に獨り卓立したりしも所以なきにはあらぬぞかし。斯る人の幼時は、亦寢物語の一材料となるべきか。

左衛門尉幼字を彌吉といふ。甲斐の人内藤吉兵衛といへるが子なり。吉兵衛は江戸に來りて幕府の小吏となり、牛籠に住みけるが、彌吉九歲の時父に連れられ

て、今はかの東叡山を見つめて突つ立ちたる大村益次郎の銅像を見るべき九段坂の下牛ヶ淵の邊を通りき。偶一貴官の威儀堂々として大道狹しと威張り來るあり、彌吉が避けざるを見て供のもの之を叱り、猶避けぬより手荒く搔き抱きて投ぐるが如くに傍に退けぬ。小き武士(彌吉)はまけぬ氣になりて

『こゝは往來だから退かぬ』

ともがく。父驚きて之をなだめ、

『彼方はゑらいお役人樣ぢやから、その樣なことを言ふものではない。早くわきへ除けるがよい』。

『では、彼は誰でしやう』。

『彼は御勘定奉行の神尾樣といふ方で、もと阿爺と同役であつたが、學問が出來る故にあの通りゑらい人になつたのぢや』。

『それでは兄も學問が出來ればゑらい人になりましやうか』。

父は微かに頷きしのみにて別に之に答へざりしも、これぞ幕末の名士川路左衛門尉の卵なりけり。

この歸りの事なり、

失意なる父子の武人は牛籠なる家に向ひて神樂坂まで來かゝりぬ。頃しも亭午もやゝ過ぎなんとしければ、父は

『御飯をいたゞいて歸かう』、

といひつゝ傍の鰻屋に入らんとなしぬ。彌吉立止りて

『兄はこゝに待つて居る』。

『何故』、

『阿爺は論語を讀む時に目上の人より先へ食べてはわるいつて言つたではありませんか、阿母が家で待て居らつしやるから、兄は食べない』。

父笑て乃ち炙り鰻を買ひ、持ち歸りて一家相對して愁眉を開きつゝ食ひぬといふ。思ふに此の團欒の一箸は大牢も曾て及ばぬ味ありしなるべし。

雜録

活字

吾が可憐なる年少讀者は吾人に書を寄せぬ。封筒に某國郡村某學校生徒と署し、左の如く言へり。

御社いよ〳〵御盛大目出度存候陳者家庭雜誌にて御用被成候字は大小いろ〳〵に候得共あれは何號の字と申候や御敎へ被下度候頓首

明治廿五年十一月一日　秋野錦次郎

家庭雜誌記者樣

吾人は喜んで之に答ふべし。愛する秋野君、看よ

初號 一號 三號 四號 五號 六號 七號 八號

保險の話（中）

世に一日乞食といふ諺あり。

大厦高樓雲に聳へ、錦衣玉食して、人目まばゆきまでに暮したるものも、寒風軒に吼ゆる冬の夜ふけて、夢濃やかなる閨の戸を半鐘の聲亂れ打たん乎、寢衣のまゝに馳せ出る頃は、車夫室の屋根紅の舌を吐き、見る見る焔は這ひひろごりて、捲き上る火の手天にも屆かんず勢となる。彼等は去りて知己緣者の家に賴る外はあらざらん。一日乞食とはこの事なり。

去れども一日乞食は猶可なり、豫め慮り置かざればながく乞食の域に陷らんとす。何となれば火事は最も殘忍なる掠奪者にして一物を遺すことをも承知せざれば。

火災保險は此の永久乞食の域に陷るを免れんが爲めに設けられし法にて、人類の幸不幸を平準し、利益損失を分擔する組織なり。

京橋區銀座三丁目廿番地に東京火災保險會社あり。今其組織方法を畧述せん、

この會社の保險に二種あり、曰く普通保險、曰く特別保險。

普通保險は、保險の金額に應じ、年々定め通りの保險料を拂込み、被保險物の燒けしとき、約束の金額を受取る法なり。去れど一定の期限ありて、期限を過ぎて火災に罹らざれば保險料は返却することなし。

特別保險は期限中に被保險物火災に罹らざるも、保險料全額の八分の五を割戻すなり。これを普通保險と異る所以とす。又一期毎の割戻しをなさずして數期を繼續したる時、

第二期(十ヶ年) 八分の六
第三期(十五ヶ年) 八分の七
第四期(廿ヶ年) 悉皆

の割合にて同じく割戻しをなす。

而して保險期限は滿五ヶ年以内なり。

保險料は

普通保險料（保險金百圓に對する一ヶ年額）

建物の用法	建物の性質 ＼ 建物の位置	第一區	第二區	第三區
第一類	第一種	一、〇〇円	一、三二円	一、五〇円
	第二種	一、一三	一、六〇	二、〇〇
	第三種	一、二五	一、八八	二、五〇
	第四種	一、三八	二、一六	三、〇〇
	第五種	一、五〇	二、四四	三、五〇
第二類	第一種	一、三二	一、六三	一、八〇
	第二種	一、四九	一、九八	二、四〇
	第三種	一、六五	二、三三	三、〇〇
	第四種	一、八二	二、六八	三、六〇
	第五種	一、九八	三、〇三	四、二〇
第三類	第一種	一、六八	一、九六	二、一〇
	第二種	一、八九	二、三八	二、八〇
	第三種	二、一〇	二、八〇	三、五〇
	第四種	二、三一	三、二二	四、二〇
	第五種	二、五二	三、六四	四、九〇
第四類	第一種	二、〇八	二、三一	二、四〇
	第二種	二、三四	二、八〇	三、二〇
	第三種	二、六〇	三、三〇	四、〇〇
	第四種	二、八六	三、八〇	四、八〇
	第五種	三、一二	四、二九	五、六〇

特別保險料（保險金百圓に對する一ヶ年額）

建物の用法	建物の性質 ＼ 建物の位置	第一區	第二區	第三區
第一類	第一種	一、九〇円	二、五一円	二、八五円
	第二種	二、一五	三、〇四	三、八〇
	第三種	二、三八	三、五七	四、七五
	第四種	二、六二	四、一〇	五、七〇
	第五種	二、八五	四、六四	六、六五
第二類	第一種	二、五一	三、一〇	三、四二
	第二種	二、八三	三、七六	四、五六
	第三種	三、一四	四、四三	五、七〇
	第四種	三、四六	五、〇九	六、八四
	第五種	三、七六	五、七六	七、九八

第三類	第一種	三、一九	三、七二	三、九九
	第二種	三、五九	四、五二	五、三二
	第三種	三、九九	五、三二	六、六五
	第四種	四、三九	六、一二	七、九八
	第五種	四、七九	六、九二	九、三一
第四類	第一種	三、九五	四、三九	四、五六
	第二種	四、四五	五、三四	六、〇八
	第三種	四、九四	六、二七	七、六〇
	第四種	五、四三	七、二二	九、一二
	第五種	五、九三	八、一五	一〇、六四

第一區は類燒の憂なき位置。第二區は二方或は三方に類燒の憂なき位置。第三區は前二區に編入すべからざる位置。

第一類は住宅又は商店の如きもの。第二類は旅籠屋料理屋又は薪炭材木等の置塲の如きもの。第三類は火力を用る製造所の如きもの。第四類は都て發火し易き物品の製造所置塲の如きもの。

第一種は煉瓦石造土造等の家屋。第二種は塗造の家屋。第三種は木造瓦葺の家屋。第四種は木造柿葺の家屋。第五種は木造藁葺の家屋。委しきは規則書を取寄せて見るべし。

讀書案内

序論

自助生

人は生活んが爲に食ふか、食はんが爲に生活るか、天下復たこれよりわかりきつたる問題あらんや。去れども暴食して病に臥すあり、暴飲して死に至るあり、世には食はんが爲に生活るものもあるなり。

人は世に立んが爲に書を讀むか、書を讀まんが爲に世に立つか、天下復たこれよりわかりきつたる問題あらんや。去れども學者にして何事をもなさぬあり、讀書萬卷にして飢を療せぬあり、世には書を讀まんが爲に世に立つものもあるなり。

幾多の靑年は唯言ふ勉强したしと。而して所謂勉强とは之を換言すれば書を讀むの謂にして、書物とへ讀めば何かは知られどゑらくなるが如く以爲ふなり。故に彼等は多くあてのなき勉强をなし、事業と學問とを別々にし、苦學十年用ゆる所なきを苦しむ者あり。

試に何の爲に書を讀むかを思ふべし、書を讀まんが爲に書を讀むにあらずして、智識を得んが爲に書を讀むにあらずや。智識を得んが爲めに智識を得るにあらずして、身を立んが爲に智識を得るにあらずや。身を立るは目的なり、書を讀むは手段なり。目的にして達し得べくんば手段は必ずしも問ふ所にあらざるべし。故に劉項元來書を讀ます。

書を讀むに心得あり、

書物を讀め、書物に讀まるゝ勿れ。

書を讀むこと萬卷にして何の役にも立たぬものは書物に讀まれたる痴漢なり、之を腐れ學者とは云ふ。所謂學問の奴隷のみ、紙をねぶる蠹魚のみ。

元來此蠧が反故紙たる書物をむやみに有り難がるが間違なり。又學問をパンのなる樹のやうに思ふが間違なり。反故紙を有り難がればこそ、活眼を以て活書を讀むことの出來ぬなれ。學問をパンのなる樹と思へばこそ、學者の貧民は繁殖するなれ。世に學者の貧民ほど始末にならぬものはなきぞかし。

去れどもこれを以て學問を要らぬこととし、讀書を役に立たぬものと思ふは、却つて大なる心得違と謂ふべし。人はパンなしには生活する能はず、學問なしには世に立つこと難し。幾千年來人類の限りなく經驗工夫したることを秩序正しく簡便に取次ぐは學問なり。讀書はその手續きなり。

唯人生準備の時代はおそくとも三十歳前後なれば讀書學問は此間に於て了せざるべからず。然るに限りある腦力を以て、限りある時間を以て、限りある貲財を以て、而して此の限りなき學海に臨む、などてたしかな

る骨操あらで之を渡り得べき。去れば

腦力の節倹
時間の節倹
學資の節倹

是に於てか最も重要なる事となり、從て

學問の撰擇
書物の撰擇

最も注意すべき事となるなり。要無益の學問無益の讀書をなさゞるにあるのみ。

時事一斑

貴婦人慈善會

去る十一日より三日間府下鹿鳴館に開きぬ。各區受持は左の如し。

（第一區）	毛利公爵夫人	川村伯爵夫人	杉子爵夫人
（第二區）	土方子爵夫人	仁禮子爵夫人	九鬼正三位夫人
（第三區）	井上伯爵夫人	田井子爵夫人	花房從三位夫人
（第四區）	伊藤伯爵夫人	大村伯爵夫人	高島子爵夫人
（第五區）	戸田伯爵夫人	榎本子爵夫人	三好子爵夫人
（茶店）	松方伯爵夫人	鍋島侯爵夫人	一條公爵夫人
	樺山子爵夫人	黒田伯爵夫人	

十一日には皇后陛下の行啓ありき。

九段坂上の銅人

九段坂、坂を上て突立すること三十尺。上に立てる一丈の銅人は、萬古千秋東叡山を望まんとす。渠は一代の兵家大村益次郎なり。益次郎善く謀れり、又善く斷ぜり。東叡山、會津城、天下の形勢方寸の中に定まり、維新の勳業指呼の間に成る。



結髪、短袴、渠が眉軒り意舒ぶるの處、月下幾人か且つ頭を廻らすらん。肩上正に半輪の秋は低れけり。

ウヱスト孃矯風演說

ウヱスト孃は十月十七日より三十一日まで府下各所に

演說なしき。孃が來遊の目的は、言ふ重に日本內部の禁酒諸會の基礎を固むるにありと。

敎育社會の二大團結

日本敎育社會は二大團結に占領せられぬ。辻新次氏の大日本敎育會、伊澤修二氏の國家敎育會是なり。共に國家的敎育を主義とするものにして、其相同じからざるは辻新次と伊澤修二との相同じからざるたけ相同じからず。

全國聯合敎育會

伊澤派の敎育者曩に仙臺に會す、之に對抗する辻派の敎育者は去月十五六七日京都に集りき。此集會の結果として下記の數事政府に建議せられぬ。

兩陛下の御影を摸したる繪畫の販賣を禁止する事。

兩陛下の御影を摸せるものにして、他の卑猥汚圖さ共に堆壓中に委積陳列し、實に視るに忍びざるものあり。斯くの如くにして推移せは、遂に風敎上に至大の影響を及ぼし、延て國體の尊嚴皇室の神聖を汚傷するに至らんも計り難し。

敎育博覽會を開設する事。

費用は國庫より支辨すべし。

小學校敎員給料中年功加俸にかゝるものは國稅を以て支出する事。

敎育會雜誌は特例を設けて第三種郵便物さなす事。

大浦慶子

大浦慶子は長崎の女丈夫なり、明治十七年五十七歲を以て沒しぬ。其行悉く正經に由りしにあらずと雖、其異常の婦人なりしことは、鎖港の日に清蘭の商人と貿易して大利を得、又日本茶生絲輸出の端緒を開きたる一事を見ても知るべし。今者長崎の有志者之が紀念碑を建んとすと聞く。

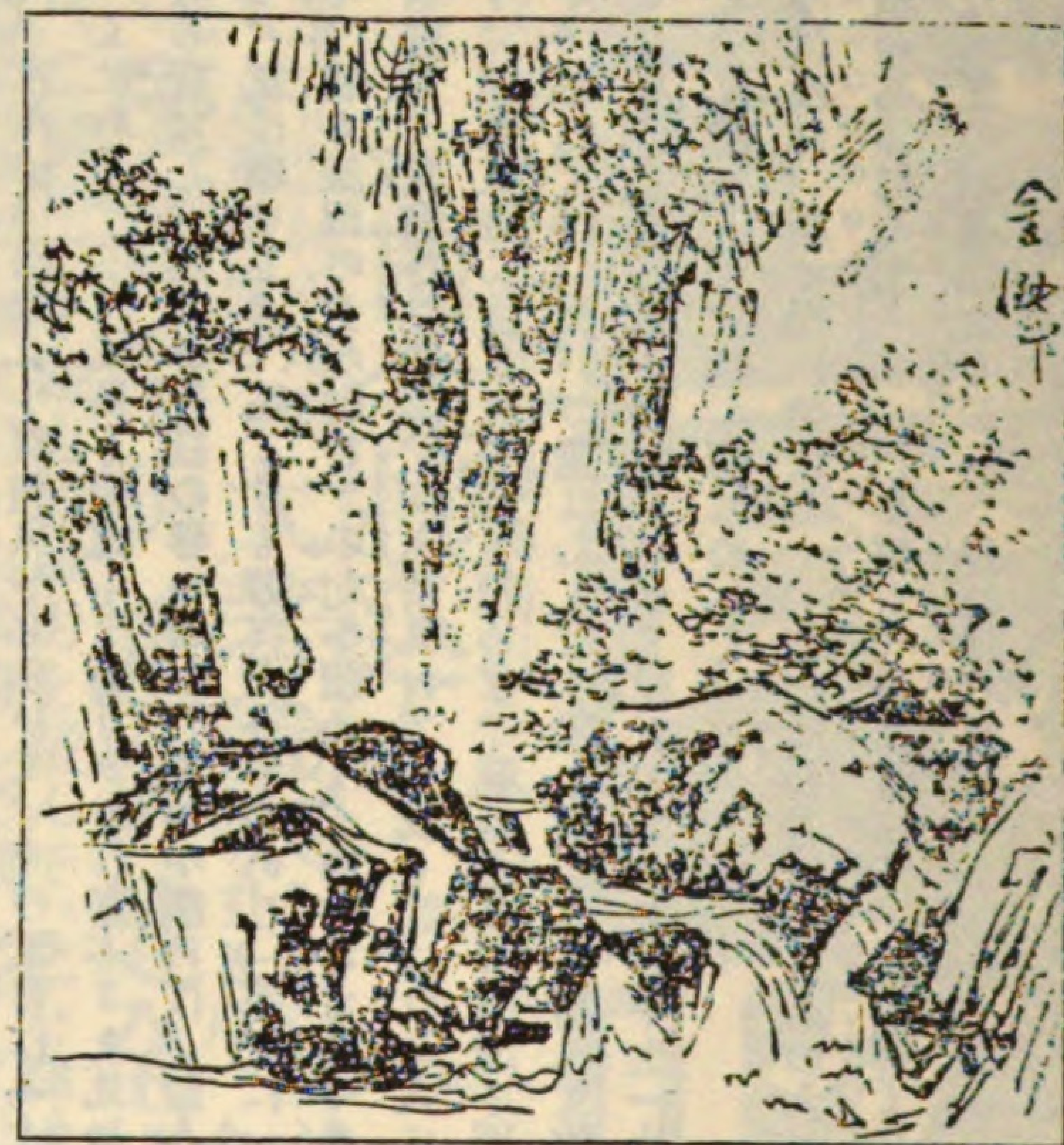
好一對

近來醜事の好一對あり、曰く文部省敎科書撿定に關する秘密の漏洩。曰く代言試驗問題の漏洩。

行樂

『白露のいろはひとつをいかにして、秋の木の葉を千々に染むらむ』。如何にして秋の木の葉を千々に染むるやは我れ知らずと雖、『見渡せば、尾上にも、麓にも、淡き濃き、紅葉の、秋の錦をぞ、たつたひめ、露霜に、さらしける』。府下百萬の人は何の處にか立田姫のさらしつる錦の袂を觀んとやすらん。秋後に霜無ふして秋のいたること

遲しとはいへ、近郊の景巳に觀るに堪ゆべし。瀧の川、秋紅碧潭に落ちて花を點せる如し、から紅に水くゝるも斯くやありなん。上野より王子まで便を滊車に假らばいとやすき事なり。品川の海晏寺は古へよりの名所なり。頭を擧げて房總の山を望みつゝ、夕日の袂を翳して幾人か紅葉の錦着てや歸らむ。芝公園の楓山、忍が岡の秋の暮、亦一入のながめなくんばあらず。若し少しく遠く去りなん乎、日光山の秋は已に老ぬらん。碓氷の嶺は如何なるべき



か知らず、中仙道鐵路を北に去て横川に至る。車を驅て上るべし。うすひとは誰が名けゝん、から紅の濃き色、近國無双と稱せらる。自狂杜牧を狂倒せしむるに足るなり。遠上ニ寒山ニ石逕斜、白雲深處有ニ人家一、停レ車坐愛楓林晩、霜葉紅ニ於二月花一。

高尾山は八王寺より二里餘の所にあり。八王寺は內藤新宿より滊車一時十六分程。

飛鳥山、向島、雜司ヶ谷、目黑、堀內、道灌山、共に枯野に遊ぶべし。

酉の市、第一第二は巳に畢りたれども猶第三あり。淺草田甫、深川公園、向島、秋葉、麹町平河天神。

菊花亦猶賞するに堪ゆ。

釣は恩法堀筋、東永代町河岸近傍、中川筋西舟堀、材木屋河岸等の沙鯔。

投書

物品寄贈

探汗生

花も獨りながめては樂多からず、酒も獨り傾けては興少なし、花見に行

きて、枝折らんは、無風流なれども、見ぬ友に家苞にせん心は、その鄙なも償ふべし、田舎の老翁が、誇りて勸むる濁酒は、旨くもあられど、己を推して隣に及ぼす志は、葡萄の美酒も、及はぬ味ひあるべし、我に樂みあれは、人と共にせんことを思ひ、我に美味あれは、人に分たんことを欲す、是れ物品寄贈の源なるべし、

物品寄贈は、社交上欠くべからざるものにて、その道と時とを得れば、以て親和を繋ぎ、以て交情を温むるに足る、

樂府上を讀めは、古人が、遠方より双鯉魚をもらひて、その素書に「上には餐食を加へよとあり、下には長く相憶ふとあり」と打喜ぶさま見えて床し、「江南有る所なし、聊か一枝の春を贈る」の句を讀めは、詩人が梅の枝折りて、友に贈りし心、花よりも芳はしきものあり、「遙かに一盃の酒を持ちて、遠く風雨の夕を慰む」の句を讀めば、山中などにやあらん、心同しき友の、寂寥を訪問ふ、深き情見えて、我も訪はれん人になりたき心地す、「遊人五陵に去る」の詩を讀めば、親しき友の、遠き國に行くとて、今、別れては、又いつ逢はんも計り難し、これは別れて後の紀念になどゝ、身にも代へ難き寶劍なれど、脫して惜まざる平生一片心、勇ましくも、又慕はしく、涙も溢れぬべし、

その道と時とを得れは、斯く洵に美はしく、洵に愛たし、そは品の大小に因らず、又價の高下にも因らず、己を推して人に及ぼす、眞情より出たる、清潔なる愛の結晶物とも云ふへけれはなり、

總じて、善き果には、惡しき蟲の着き易く、美しき事には、醜き物の纒ふこと多し、その道と時とを以てすれは、斯く清潔美麗なるものも、若し其道と時とを得ざれは、虛飾、僞善、甚たしきは賄賂なと、恐るへき背德の媒介となるものなり、

人々質朴平直なりし時は、こは旨まし彼に分たば、こは珍らし彼に與へなば、如何に喜はんとの眞情より、只だ我に有るもの、若しくは我が珍らしと思ふ物をのみ、贈りつらんも、其の人ゝ智巧に赴き、利名に馳せ、虛榮を愛し、奢侈を好み、眞情薄く、誠心乏しくなりては、彼處に行くには、徒手にては行かれず、初めて逢はん人に、土產なくてやは、己れの身分にては、斯樣の物は遣られず、彼れの位地には、此樣の品は贈られずとか、或は他日何事をか要する地とせんなど、必要もなく、深切もなきに物を贈り、果ては徒らに、品の貴とく、價の高きを思ふより、品物のみにては飽き足らず、菓子折の內に、黃金花咲き、松魚節に、銀鱗の生ずるなどの、怪しき事の行はるゝなり、物品の寄贈、その虛飾の爲めに使はるゝすら、本旨に戻りて慨くべきに、況して、賄路なとに、用ひらるゝに至りては、其害言ふに忍ひざるなり、たとひ今日人ゝの多くは、賄路には用ひざるも、妄用濫行、その道と時とを、失はざるものは、いと〳〵稀なり、

予は屢ゝ、今日の活計にも、差支やせんと思はるゝ人の、長上などへ、四季の進物など、驚かれんばかりの品を、贈るを見て、その必要はさて置き、如何にしてかゝる價貴き物を、購ひ得たるかと考ろに、大方は他より金かりてか、若しくは細君の衣服を典しなどして、得たるものならん、さては、その心の中、如何に苦しからん、又その受けし方を、如何にと見れは、「先頃誰れ方より、彼樣の品を貰ひぬ、何物か相應の答禮をと思ひ居たるに、好き物來りたり、こを彼處に廻せ」とその物、つゝみ紙と名刺と換りて、直に他に移さる、斯くてまはりまはること幾回そや、斯くして受けたる菓子は、たとひ、玉の如く美はしくとも、蛇の踏る心地やせん、錦繡も裁ちては、木綿よりも冷かなり、

英國現內閣大臣、國會議員、大學教授ブライス著
人見一太郎譯

平民政治

菊判總紙數二千九百三十四頁
總クロース。美製本。ゼームスブライス肖像入
合本二册正價四圓
運賃二十錢

本月より帝國議會開會中特別割引合本二册賣價**二圓五十錢**運賃**本社自辨**の事、但し注文の諸君は必らず**前金拂込**を要す

本書の第十九世紀の尾端**大著述**たることは、歐米諸國の學者、政治家、立法家、新聞雜誌、異口同音に證明する所、今や我邦立憲政躰建設せられ、漸く輿論政治の佳境に進まんとす、此時に於て**堅實、精明、適切、健全**なる**政治的知識**を得んと欲せは、此書を措いて亦た他に求む可きなし、我社夙に見る所あり、二個年二十個月の歲月を積んで、之を譯成す、譯文の謹嚴、明朗、精確、三千頁に近きも、一字一句の苟もする所なきは、敢て自から公言して憚らざる所、亦た世上具眼者の認むる處、今や帝國議會開會中を期し、**大**に**價格**を**減**し、以て我邦政治的知識の普及を計らんとす、是れ聊か吾人が江湖に酬ひんと欲するの微志也頃ろ米國禁酒會派出員ウェスト孃我邦に來る、人其の愛讀の書を問ふ、孃答へて曰く、ブライス氏平民政治實に其の一なると、巾幗者流にして此言を爲す、我邦議員、法律家、政治家、有志家、實業家、學生、たるもの豈に此書に孤負して可ならんや、抑も亦た我社が諸君に與ふ好機會に孤負して可ならんや、本書の著者ブライス氏は、オックスホルド大學の敎授にして、嘗て廣氏內閣に在り外務次官たり、今や自由黨の最も傑出したる名士として議院に在り、現に廣氏の新內閣に立て內閣大臣の椅子を占む、其の學識淵博にして、觀察銳敏、判斷公明にして、推論精到、而して坐して言ふ可く、起て行ふ可く、一點空疎腐迂の痕なきは、氏が本色、而して其の本色を發揮したるは、未だ此書に優るものあらず、

發行所 東京京橋區日吉町四番地 **民友社**

國民新聞

十一月以後の國民新聞

帝國議會に於ける政府の眞相、政黨の戰畧、中立獨立各倶樂部の離合向背等を洞察し、俊敏犀利なる實測を施すは、十一月以後の我國民新聞也。

議場に於ける政府諸政黨の重もなる問題を分析し、勝敗利鈍の區別を明にするは、十一月以後の我國民新聞也。

政府部内の機微を穿ち、その民間各派に對する感情思慮を括描するは十一月以後の我國民新聞也。

高眼獨歩、群議噴々の外に立ち、第四議會に於て、是非共、通過せざる可らざる重要緊切の諸問題を、説明し、論議し、開陳し、痛説し、以て豫め其地を作すは、十一月以後の我國民新聞也。

斯くの如くして議會に臨むの經路を開拓し、斯くの如くして堂に上ぼり劇を見るの階段を造營し、以て第四議會を讀者の眼前に躍如たらしむるもの、十一月以後の我國民新聞也。

而して幕落ち技始まるの日、本年別に一生面を開くの新案を以て、明亮に愉快に議會の進行を描寫し加るに諤論讜議、以て國家禍福の判ずる所を明示するは、開會以來の我國民新聞也。

要するに其の儼然たる獨立新聞の位置よりして、其の眞心と、知識と、勢力の授くる全力を擧けて、眼前に横る帝國議會に當らんと欲するは、十一月以後の我國民新聞也。

定價　一枚一錢五厘　一ヶ月前金卅錢　三ヶ月全八十五錢　地方は郵税一枚五厘
一ヶ月十三錢を要す

國民新聞+國民之友+家庭雜誌、購讀諸君に對する特別大割引廣告

帝國議會の開會近づけり、國民之友及び國民新聞大に氣焔を吐かんとす、冬の日は近づけり、家庭雜誌は快よく、爐邊團欒の樂を助けんとす、此の時に當り一大經濟法の以て讀者に進むべきあり、即ち國民之友、國民新聞、家庭雜誌を並に購讀し、本月より第四議會開會中に、半ヶ年若しくは一ヶ年前金を拂ひ込む諸者には左表の如き割引をなすべし、



	一ヶ月前金	半ヶ年前金	一ヶ年前金	一部定價	半ヶ年特別割引上一部の價	一ヶ年特別割引上一部の價
國民之友	十八錢	一圓一錢（郵稅九錢）	一圓九十八錢（郵稅十八錢）	六錢	五錢五毛	四錢六厘八毛
國民新聞	三十錢	一圓七十錢（郵稅七十八錢）	二圓四十錢（同一圓五十六錢）	三十錢（一ヶ月）	二十五錢五厘（一ヶ月）	二十四錢（一ヶ月）
家庭雜誌	五錢	三十錢（郵稅三錢）	五十錢（同六錢）	五錢	四錢五厘	三錢五厘四毛
合計	五十三錢	三圓一錢（同九十錢）	五圓八十八錢（郵稅一圓八十錢）			
特別割引		二圓七十錢（同九十錢）	五圓（郵稅一圓八十錢）			

半ヶ年前金は合計三圓一錢を**二圓七十錢**に減し、一ヶ年前金五圓八十八錢を**五圓**に減すべし、其の結果は半ヶ年にては家庭雜誌を無代價にて讀むべく、一ヶ年にては家庭雜誌を無代價にて讀みたる上尚ほ三十八錢を餘すべし、これ豈に一大經濟法にあらずや、但し東京市外は郵稅半ヶ年九十錢一ヶ年一圓八十錢を要す

家庭雜誌定價表

	前金	地方郵税共
一冊	五錢	五錢五厘
六冊	三拾錢	三拾二錢
拾二冊	五拾錢	五拾六錢

廣告料　二拾四字行數回數に付割引無　**八錢**

本社は前金にあらざれば發送せず爲替は芝口支局宛郵券代用は爲替の無き地に限り一割増しの事

發行兼印刷人　垣田純朗
編輯人　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　**家庭雜誌社**

明治廿五年九月十四日遞信省認可



神戸元町通五丁目　精々藥館發行

價金大函(六十個入)四十錢○小函(二十個入)十錢

効能の理解

往昔の醫者は内服藥を以て子宮病乃ち血の道を治せんと欲し近來吾國醫藥學の開くるに隨ひ其外科術に屬するを覺り病院其他一般醫家に於ても大抵洗滌劑を用ゐるを常とす今此綿球が治病の目的は即外科的療法に應し且つ學理上之れを是認すべきは勿論患者其人の爲め寔に必要缺くべからざる理由左の如し

第一　此綿球は子宮及膣諸病に最も適切なる藥物の溶液を充分浸染せしめたるものなれば其藥効をして容易に深部に達せしむるの手段に副ひ(乃ち藥液を注射して洗滌するの理に同じ)以て能く其病を治することを得べし

第二　此綿球は子宮及膣内の滲出物を悉く吸收し去るの作用あるを以て其腐敗して他の疾病を續發し或は流出散亂して陰部の不潔となるを防ぐ

第三　此綿球は通常栓塞紙の用と爲し得べきを以て經血或は帶下の不斷流出るを防ぐ

第四　此綿球は膣内の潰瘍面(下疳或は其他の瘡より生ず)を被覆し疼痛を鎭め且つ清潔として以て治癒を速ならしむ

第五　此綿球は滲出物の性狀を直ちに檢し得べきを以て即其病症如何を推知し之れに應ずるの注意を與ふるの便あり

發賣

東京銀座一丁目　佐々木玄兵衛

大阪四ツ橋東詰　本林丁子堂

東京兩國村松町　岩涙長藏
東京兩國米澤町　大木口哲
東京本郷眞砂町　尾澤荇生堂
横濱縣町　里見亨太郎
仙台南町　後藤清善

名古屋京町三丁目　小島清助
京都四條通御旅町　饗庭貨生堂
熊本新町一丁目　渡邊破右衛門
鹿兒島山下町旭通　富山仲吉
水戸泉町三丁目　加納興右衛門

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行